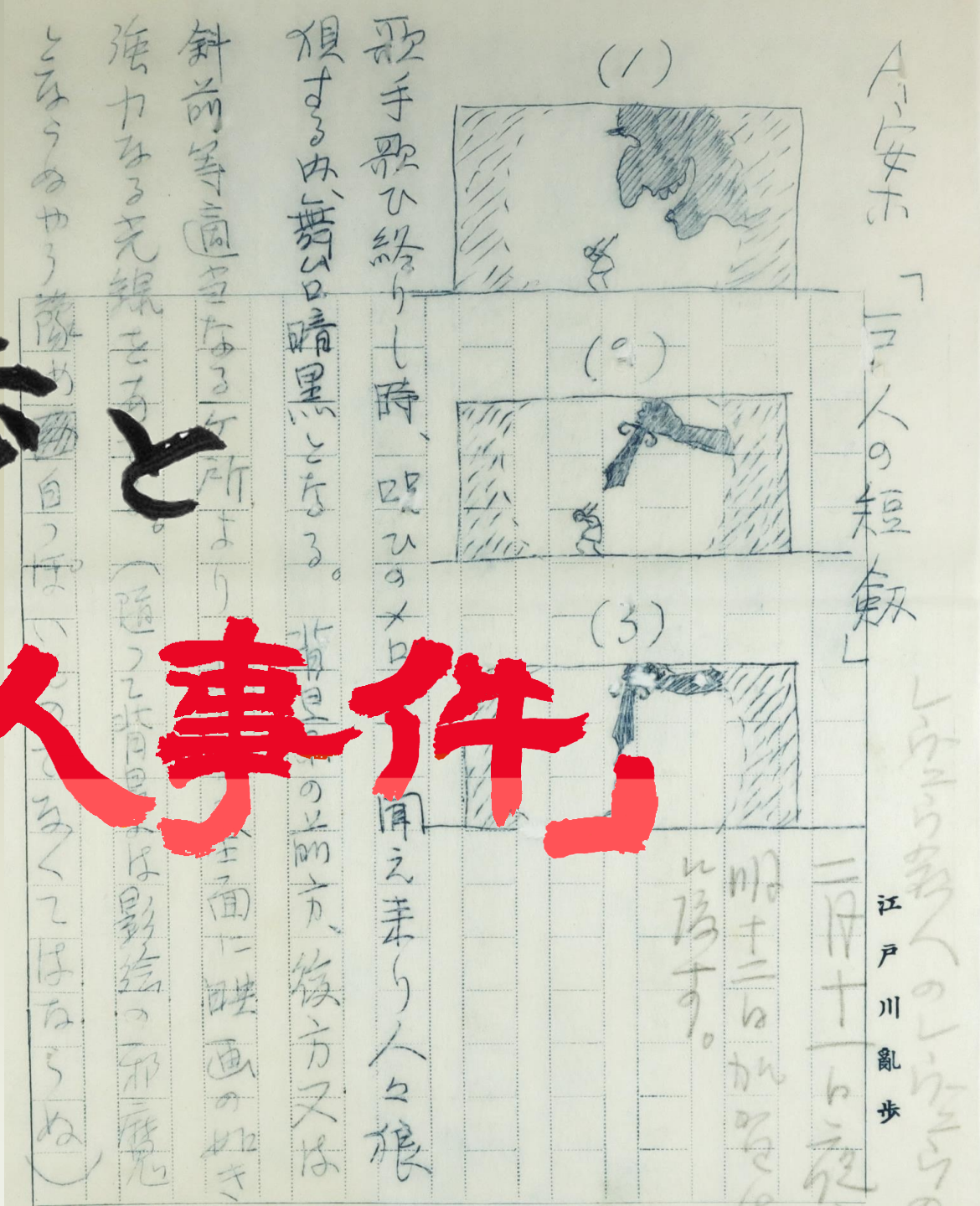
立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
Rikkyo University The Edogawa Rampo Memorial Center for Popular Culture Studies

WEB展示

戦後の乱歩と「レヴュー殺人事件」

江戸川乱歩旧蔵資料展

2021年4月よりWEB上にてアーカイブ展示



Introduction.

疎開先の福島県から池袋の邸宅に戻った江戸川乱歩は、敗戦後の状況に茫然自失としていた大下宇陀児や水谷準に**「いよいよ探偵小説復興のときが来た」**と宣言したという。

その後、乱歩の予言したように、探偵小説の需要は拡大していった。様々な出版社から探偵小説を特集する雑誌や叢書が刊行され、乱歩の旧作も出版が相次いだ。さらに「心理試験」を原作とした映画が公開されるなど、乱歩の文芸は再び人気を博す。

第二次世界大戦後、流通し始めた進駐軍放出の欧米ミステリー小説を収集する乱歩のもとに探偵小説作家や愛好家が集い、土曜会と名付けられた集会が開催されるようになった。その後、土曜会は探偵作家クラブへと発展し、乱歩はその初代会長となる。

この時期の乱歩は新作小説こそ発表しなかったが、探偵小説ジャンルの秩序化と、その作家たちの組織化を推し進めた。それは探偵小説界を戦後の社会に順応させる試みだといえる。

そのなかで、乱歩たち7人の探偵小説家が携わった舞台**「レヴュー殺人事件」**の原案は、探偵作家クラブとして初めて収益を得た活動であった。同作に関する資料からは、探偵作家クラブ発足の軌跡と、乱歩たちの知られざる奮闘を見出すことができる。

立教大学の図書館や江戸川乱歩記念大衆文化研究センターに寄託・所蔵されている乱歩旧蔵資料には、様々な文芸営為の痕跡が残されている。

これらの資料から、探偵小説の復興が実現されていく様相を紐解いていく。

戦後に出版された仙花紙本

戦後、「青銅の魔人」（『少年』1949/1～12）まで新作小説の発表がなかった乱歩だが、旧作は盛んに出版された。その多くは、仙花紙とよばれる粗悪な紙を用いた書籍だった。

・江戸川乱歩『人間豹』一号館書房　1946

・江戸川乱歩『湖畔邸事件』 乱歩選集1　スピカ　1946

・江戸川乱歩『黄金仮面』丘書房　1946

・江戸川乱歩『猟奇の果』日本小学館　1946

・江戸川乱歩『闇に蠢く』オール・ロマンス社　1947

・江戸川乱歩『柘榴』雄鶏社　1947

「心理試験」を原作として、戦後に制作された大映映画「パレットナイフの殺人」

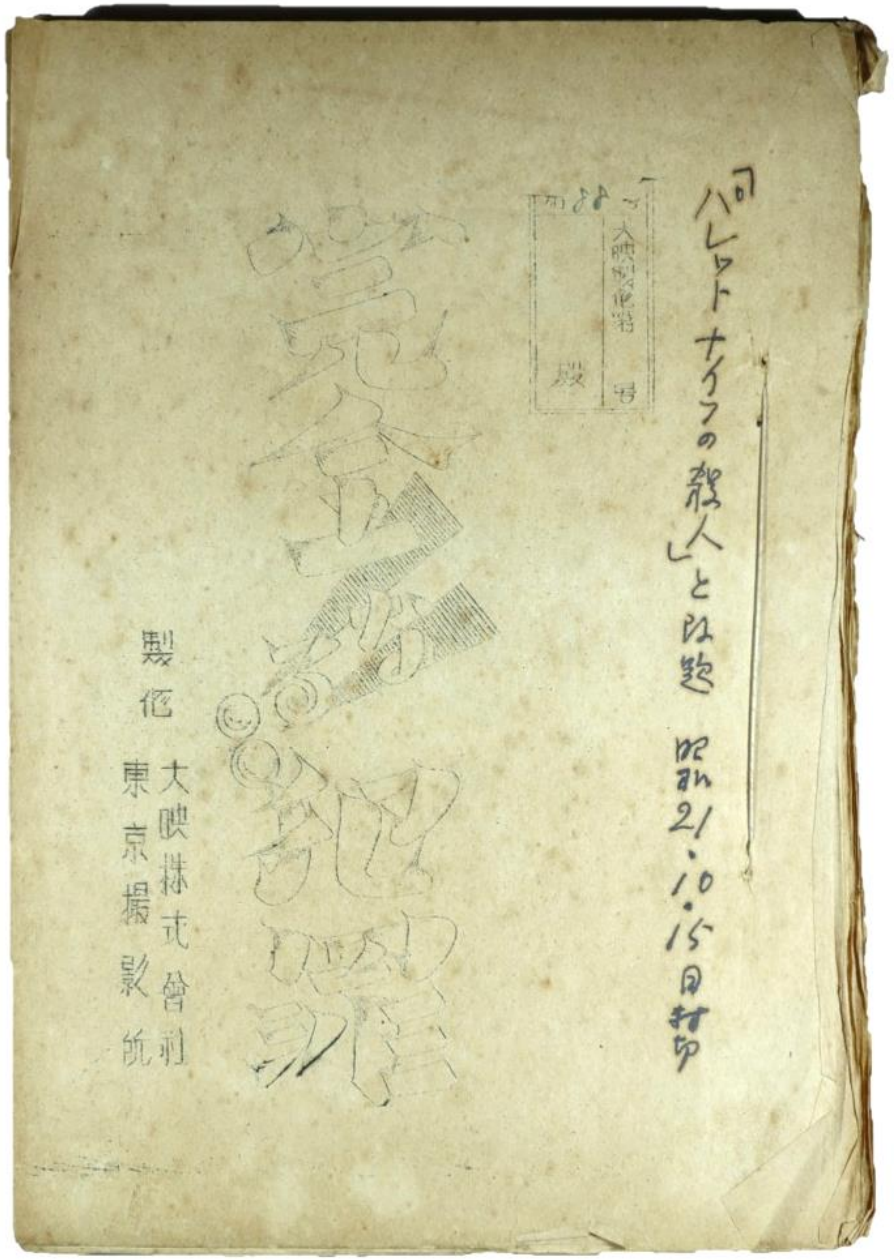
乱歩が1925年に発表した小説「心理試験」は、1946年、大映によって「パレットナイフの殺人」（監督：久松静児、脚本：高岩肇、企画：加賀四郎）として映画化された。

乱歩旧蔵の脚本では「完全なる犯罪」というタイトルになっているが、当時の大映社長・菊池寛の発案によって「パレットナイフの殺人」というタイトルに決定したという。

・「パレットナイフの殺人」脚本　1946　寄託資料

・「パレットナイフの殺人」ポスター　1946　寄託資料

・「パレットナイフの殺人」パンフレット　1946　寄託資料



Chapter 01.

戦後の江戸川乱歩と欧米ミステリー

第二次世界大戦後、乱歩は進駐軍放出の欧米ミステリーを買い漁った。立教大学図書館に所蔵されている乱歩旧蔵本には、見返しに読後の感想が書き込まれたペーパーバックも含まれている。

なかでもウィリアム・アイリッシュの『**ファントム・レディ**』は、当時の乱歩にとって特別な一冊であった。

乱歩旧蔵本の見返しには「新しき探偵小説現はれたり、世界十傑に値す。直ちに訳すべし」という感想が書きつけられている。この小説に心酔していた乱歩は自ら翻訳を試みたが、翻訳出版の事情によって企画は頓挫してしまう。

大量の欧米ミステリーを読み、その記録と分析に取り組んだ乱歩は、国内外の探偵小説を網羅したトリックの類型化を企て、**「欺瞞系譜」**や**「ツリック分類表」**などを作成していった。

『宝石』創刊号

岩谷書店　1946/4

立教大学図書館蔵

戦後まもなく、複数の探偵小説雑誌が創刊された。

『宝石』創刊号の表紙裏には、収集したペーパーバックを背景にして床の間に座る乱歩の写真が掲載されている。

（寫眞・江戸川亂歩氏）

（撮影・岩谷吉二）

青ざめた光の充滿した閉かずの間で、殘虐な繪草紙を前に、眞夜中刻に限つて、執筆をなさる江戸川亂歩!!　書齋における亂歩先生を描く今迄の雜誌記者は、ことさら先生を變質者あつかひにして、ある一部の讀者を喜ばしてゐたのである。

だが、書齋における現實の江戸川先生は、大學教授と申上げた方が適切な明るい文化人なのである。床の間の隅々まで、ぎつちりと積重ねられた洋書の山でもわかるやうに、先生の唇から花火のやうに炸裂する言葉は、短波受信機の正確さと進歩を持つてゐる。

明朗な探偵小説の鬼は、新時代の文化人の胸のなかに、生々と活動するでせう、とは江戸川先生の言葉であつた。（武田武彦記）

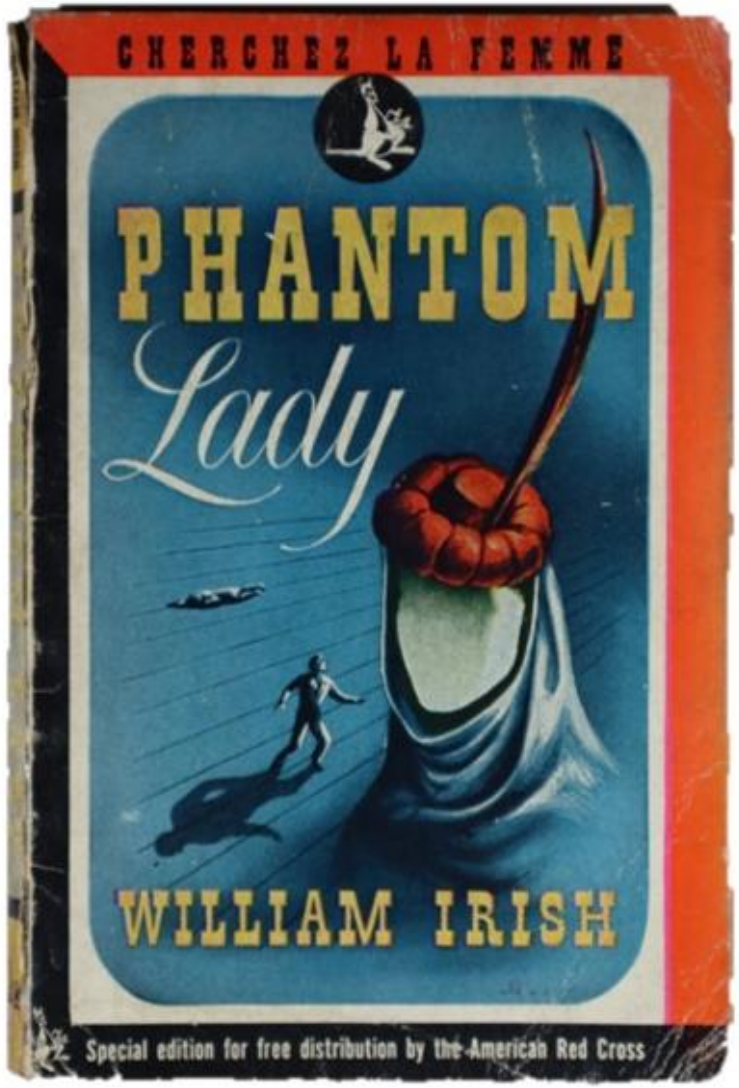
William Irish.

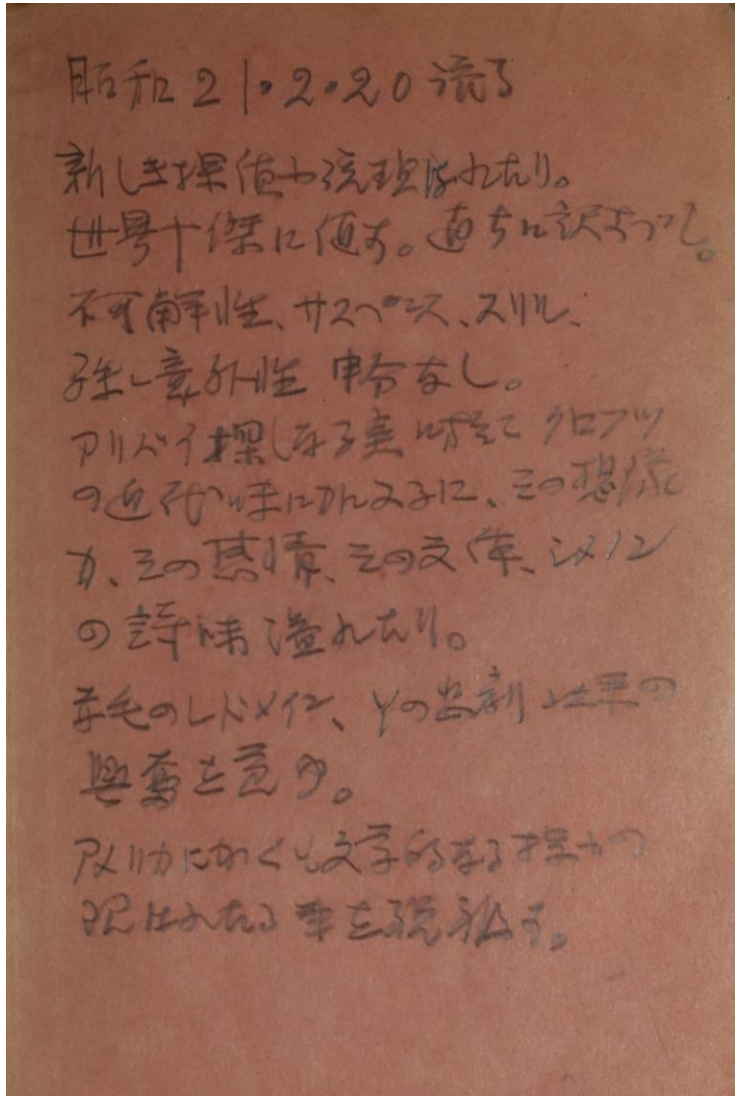
Phantom Lady

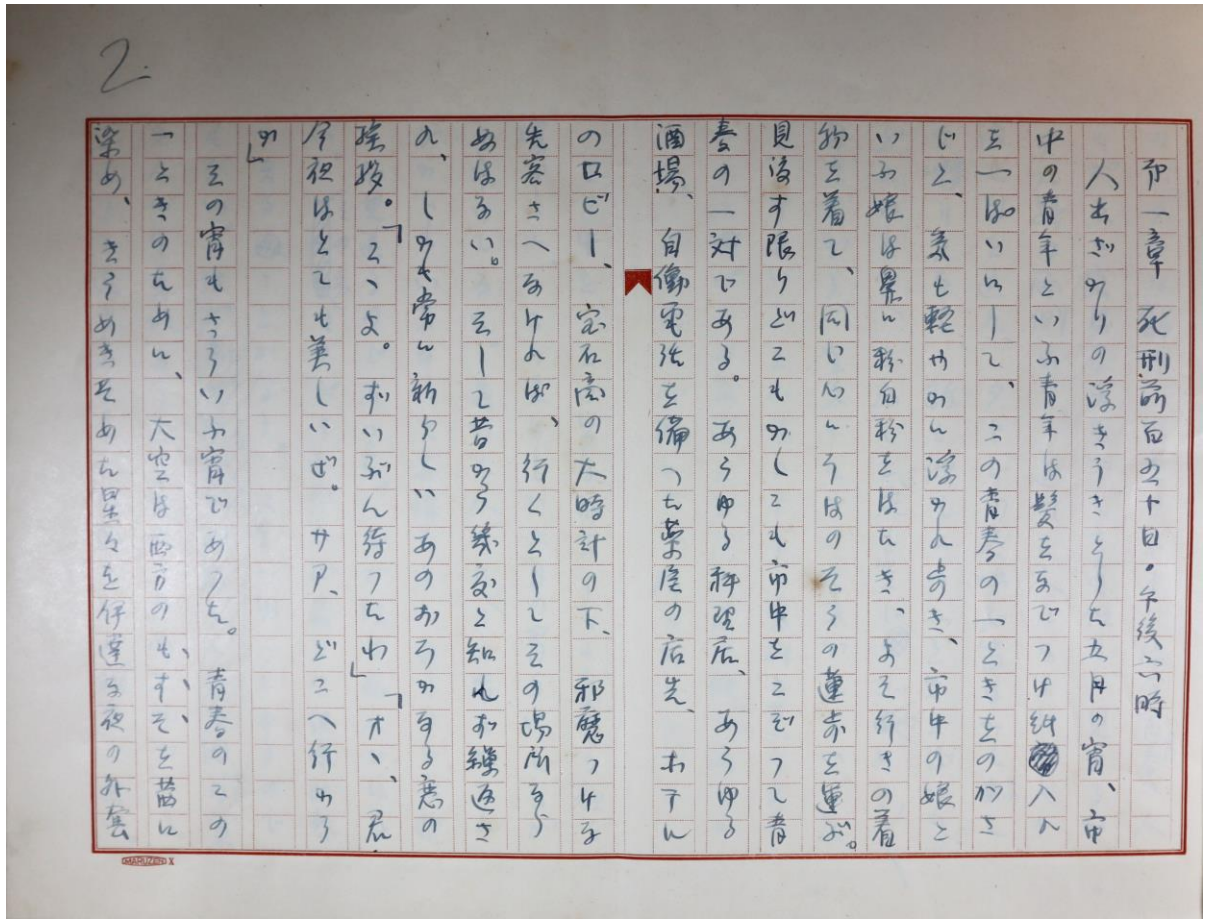
Pocket Books, 1944, c1942

立教大学図書館蔵

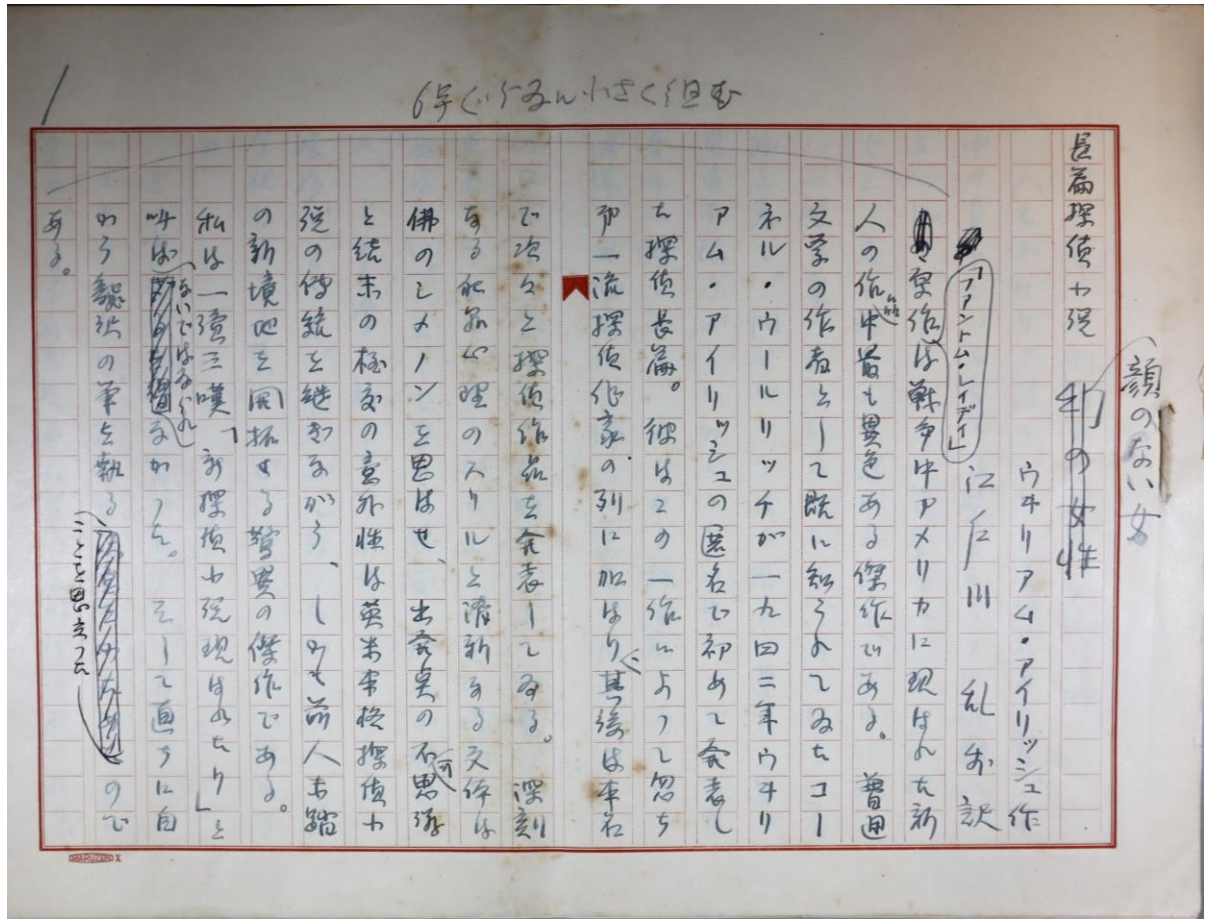
ウィリアム・アイリッシュ『ファントム・レディ』を読んだ乱歩は、見返しに鉛筆で「新しき探偵小説現はれたり、世界十傑に値す。直ちに訳すべし」と書きつけるほど、高く評価した。




昭和21・2・20読了
新しき探偵小説現はれたり。
世界十傑に値す。直ちに訳すべし。
不可解性、サスペンス、スリル、
強い意外性 申分なし。
アリバイ探しなる意味でクロフツの
迂遠味にかんみして、この想像
力、この技術、この文体、シメノン
の詩情溢れたり。
孤独のレンメイ、Yの悲劇 以来の
興奮を覚ゆ。
及川にかくも文学的なる探偵
説はめたる事を感謝す。



2/16



1/16

江戸川乱歩訳／ウィリアム・アイリッシュ作「顔のない女」解説および翻訳草稿

1946/3記

寄託資料

「ファントム・レディ」に心酔した乱歩は、自ら翻訳を試みた。しかし、翻訳権の問題で企画は実現せず、翻訳は冒頭のみで中絶している。

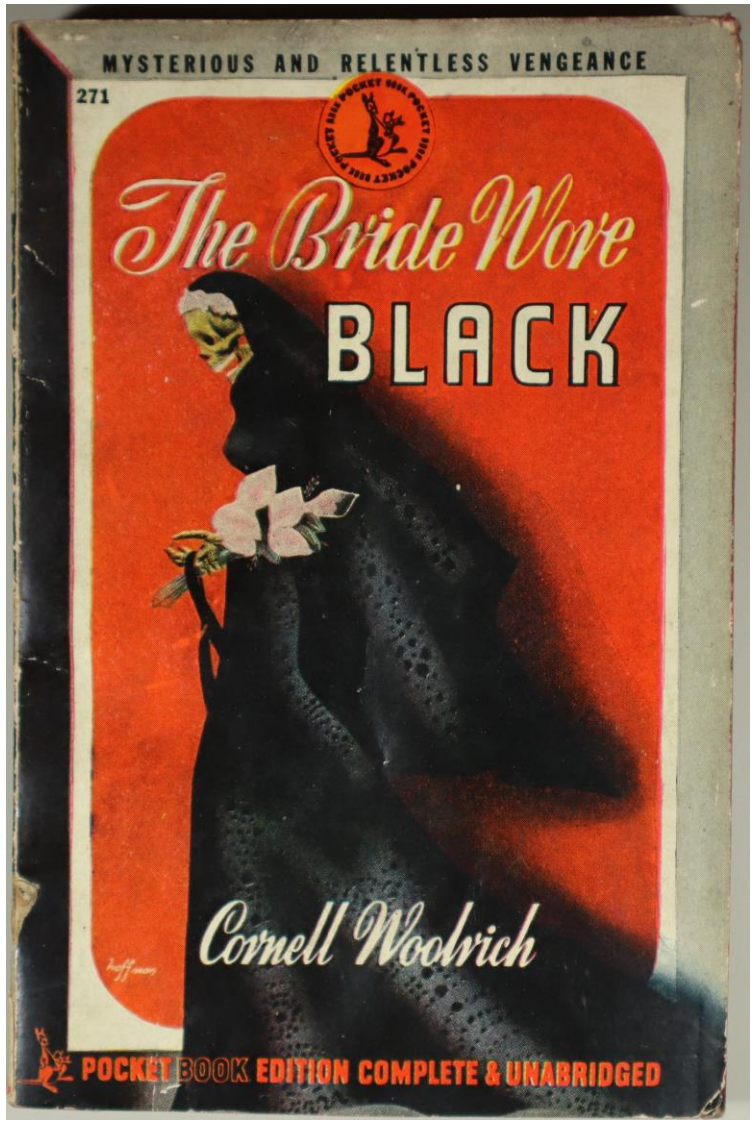
Cornell Woolrich.
The Bride Wore Black

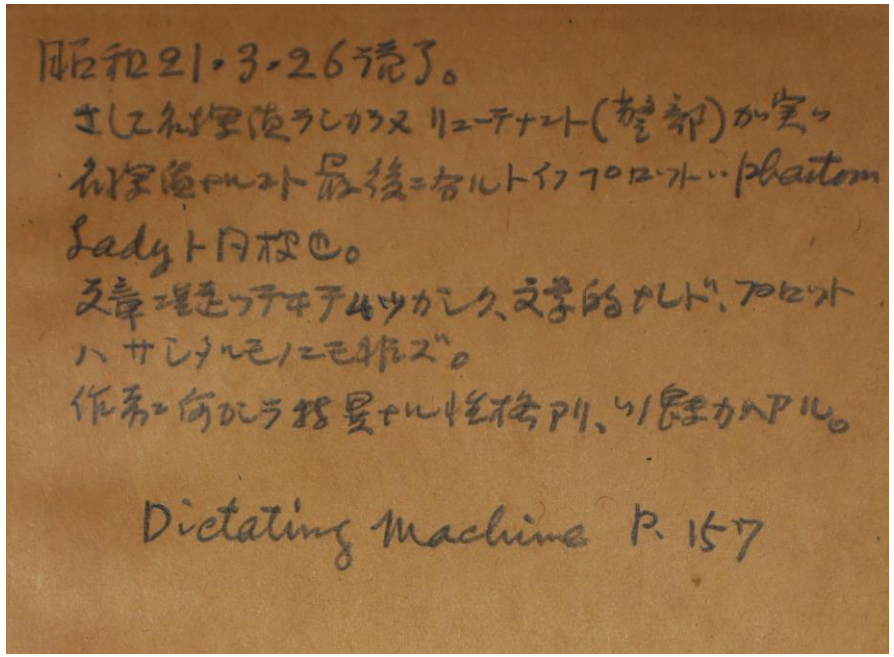
Pocket Books, 1945
立教大学図書館蔵

ウィリアム・アイリッシュは、コーネル・ウールリッチという筆名でも活動していた。

『ファントム・レディ』に惹かれた乱歩は、「黒衣の花嫁」や「暁の死線」など、ウールリッチ／アイリッシュ作品を収集した。

乱歩旧蔵の *The Bride Wore Black*（『黒衣の花嫁』）や *Deadline at dawn*（『暁の死線』）のペーパーバックにもメモが書かれている。





昭和21・3・26読了。
さして名探偵ラシカラヌ　リューテナント（警部）が実ハ名探偵ナルコト最後ニ分ルトイフプロットハPhantom Ladyト同様也。
文章ニ凝ッテヰテムツカシク、文学的ナレド、プロットはサシタルモノニモ非ズ。
作者ニ何カシラ特異ナル性格アリ、ソノ魅力アル。

Dictating machine P.157

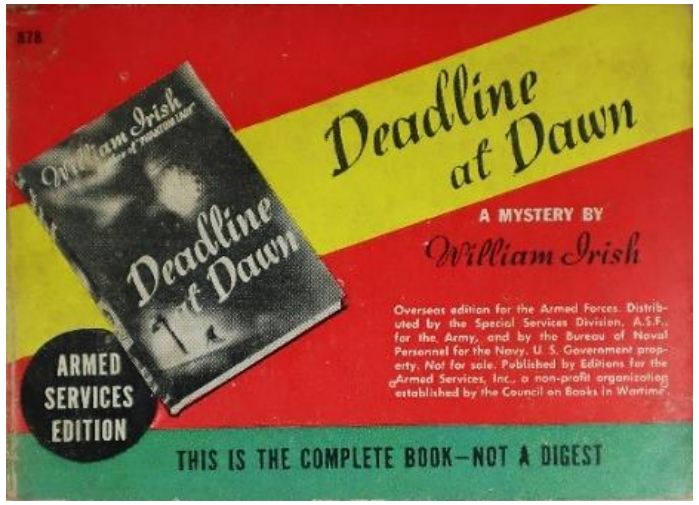
William Irish.
Deadline at Dawn

Armed services editions, c1944

立教大学図書館蔵

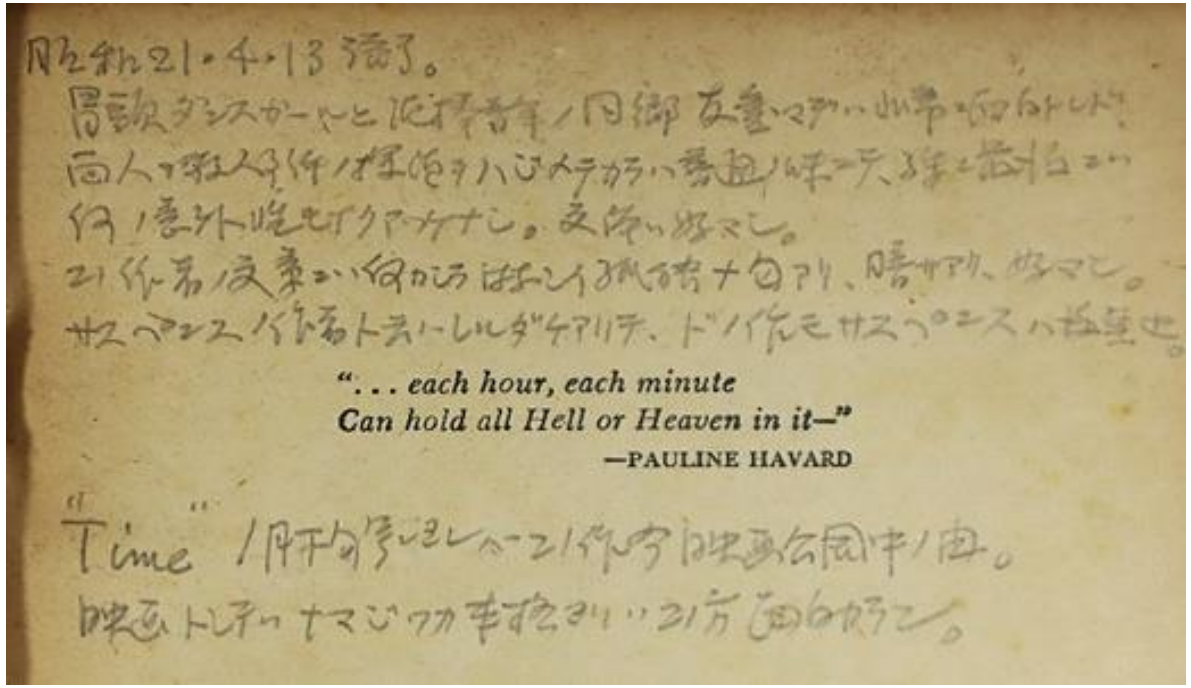
乱歩旧蔵の*Deadline at dawn*（『暁の死線』）は軍隊版の横長サイズのペーパーバック。

〔参照〕米山大樹「江戸川乱歩書き入れ旧蔵書 William Irish. *Deadline at dawn*（ウィリアム・アイリッシュ『暁の死線』）」（『センター通信』2021/3）



昭和21・4・13読了
冒頭ダンスガールと泥棒青年ノ同郷友愛マデハ非常ニ面白ケレド、両人ガ殺人事件ノ探偵ヲハジメテカラハ普通ノ味ニテ、殊ニ最後ニハ何ノ意外性モナクアッケナシ。文体ハ好マシ。
コノ作者ノ文章ニハ何カシラ淋シイ孤独ナ匂アリ、暗サアリ、好マシ。
サスペンスノ作者ト云ハレルダケアリテ、ドノ作モサスペンスハ極点也。

“Time” １月下旬号ニヨレバコノ作今映画公開中ノ由。
映画トシテハナマジッカ本格ヨリコノ方面白カラン。



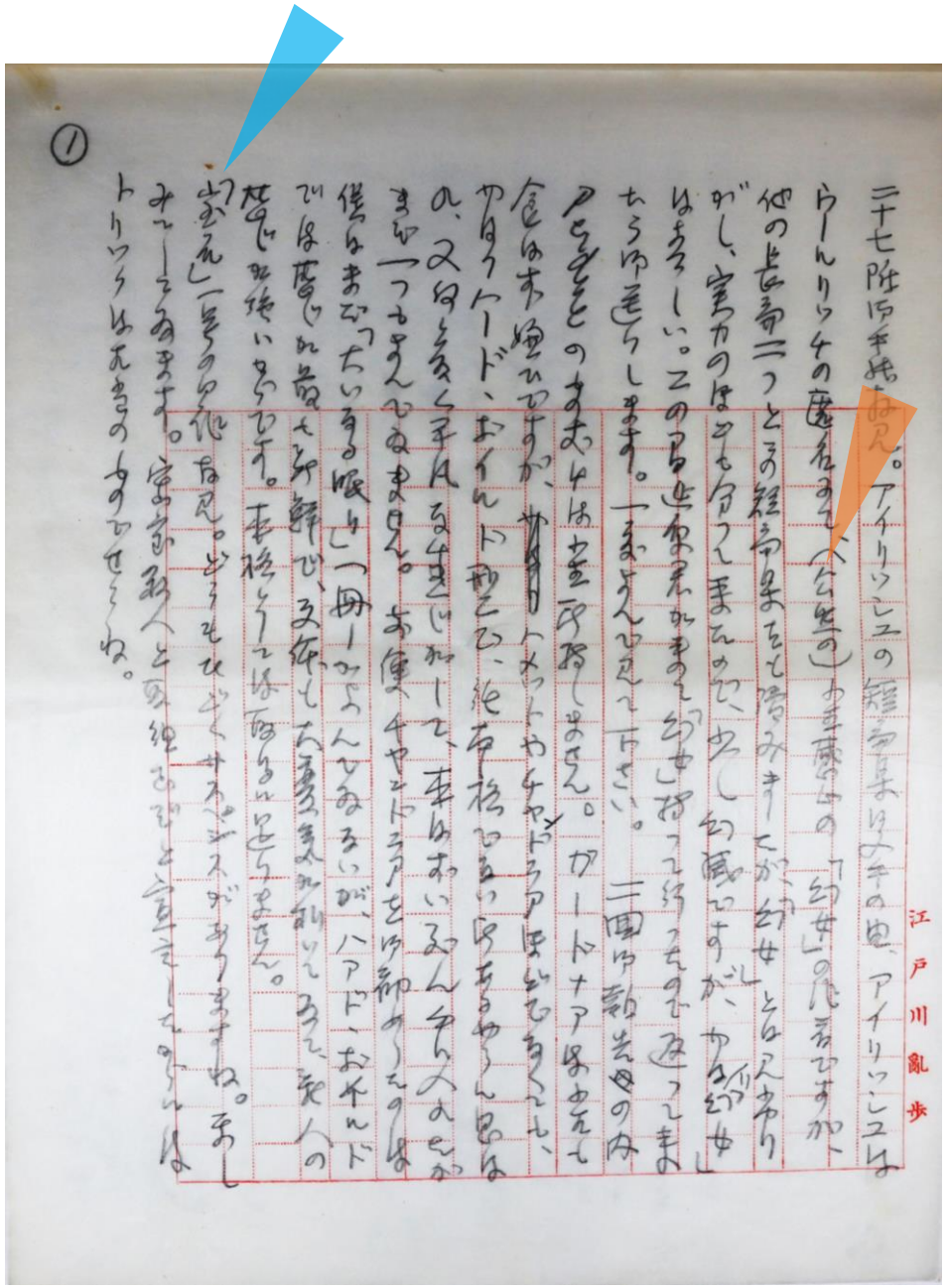
江戸川乱歩
横溝正史宛書簡控

1946/5/3記

寄託資料

乱歩は友人らと海外ミステリー小説についての情報交換をしていた。

「（公然の）小生感心」の作と述べるウィリアム・アイリッシュ「ファントム・レディ」を貸す約束や、『宝石』創刊号に掲載された『本陣殺人事件』についての感想が書かれている。



江戸川乱歩

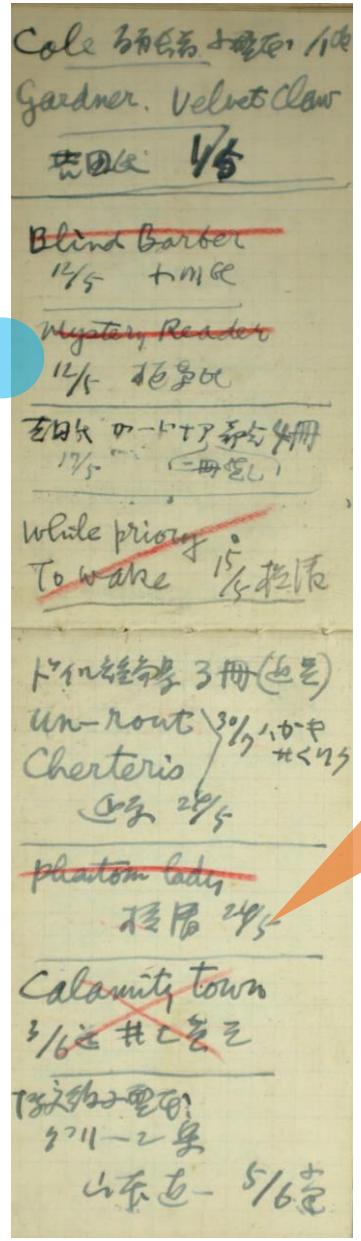
1/4

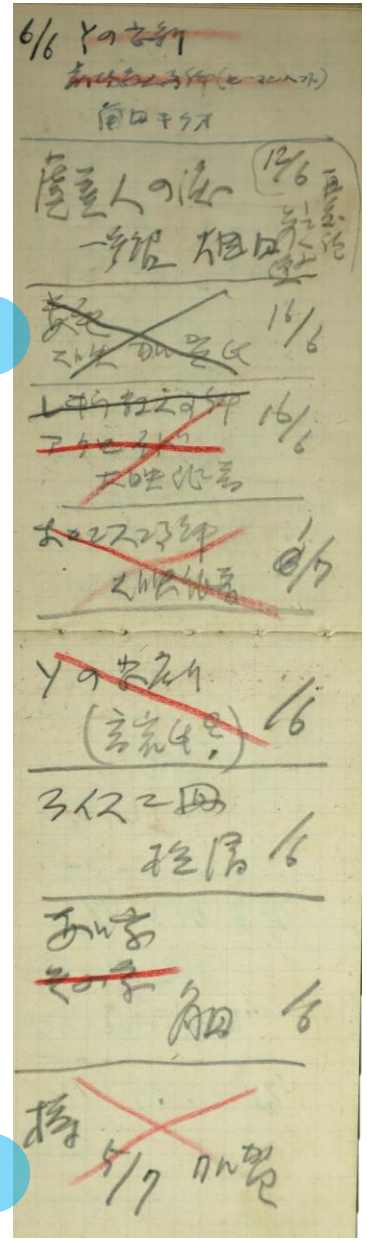
「昭和二十一年初貸本控帖」

1946

乱歩は蔵書の貸し出しを手帳に記録していた。

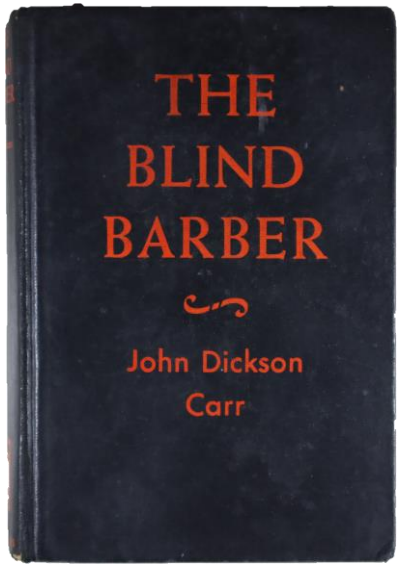
この年の5月24日に横溝正史のもとへ『ファントム・レディ』を送ったこと分かるほか、植草甚一や加賀四郎らとの交流が窺える。

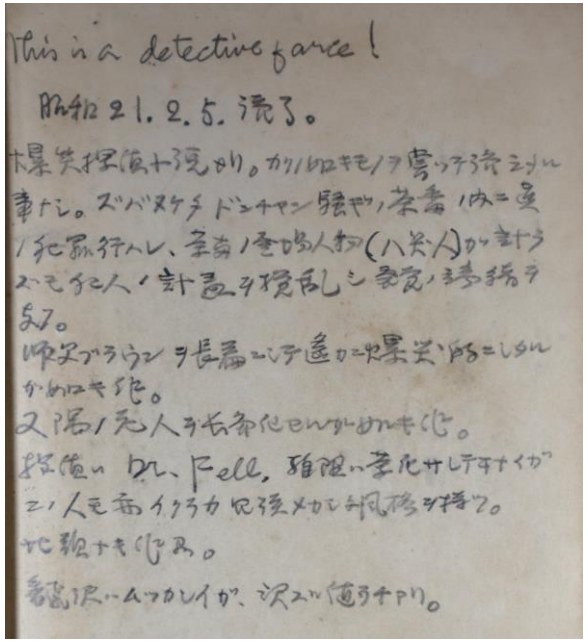




John Dickson Carr. *The blind barber*

A Harper sealed, 1934
立教大学図書館蔵





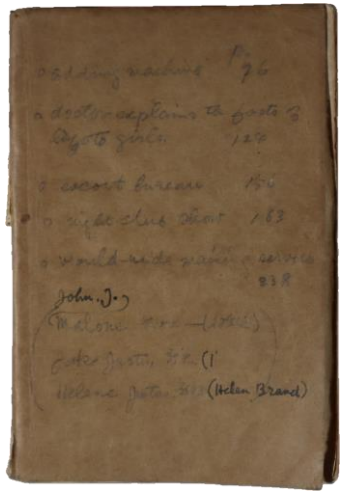
〔John Dickson Carr. *The blind barber* 見返しメモ〕

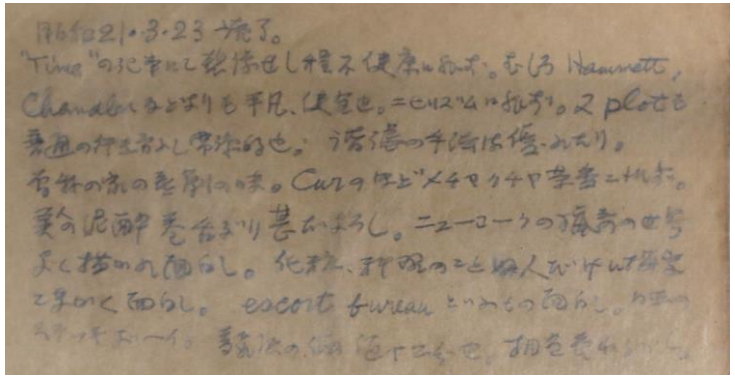
This is a detective farce!
昭和21・2・5読了。
爆笑探偵小説ナリ。カクノ如キモノヲ嘗ツテ読ミタル事ナシ。ズバヌケテドンチャン騒ギノ茶番ノ内ニ真ノ犯罪行ハレ、茶番ノ登場人物（八笑人）ガ計ラズモ犯人ノ計画ヲ撹乱シ発覚ノ端緒ヲ与フ。
師父ブラウンヲ長篇ニシテ遥カニ爆笑的ニシタルガ如キ作。
又隅ノ老人ヲ長篇化センガ如キ作。
探偵ハDr. Fell.　推理ハ茶化サレテナイガ
コノ人モ亦イクラカ冗談メカシタ風格ヲ持ツ。
比類ナキ作品。
翻訳ハムツカシイガ、次スル値ウチアリ。

Craig Rice. *Having wonderful crime*

Pocket Books, 1945
立教大学図書館蔵

ウィリアム・アイリッシュ同様、クレイグ・ライスも乱歩が高く評価した「戦争中に現われた新人」のひとり。彼女の諸作やディクスン・カー *The blind barber*（『盲目の理髪師』）などに共通する作風を、乱歩は「ディテクティブ・ファス」「爆笑探偵小説」と呼んだ。





〔Craig Rice. *Having wonderful crime* 見返しメモ〕

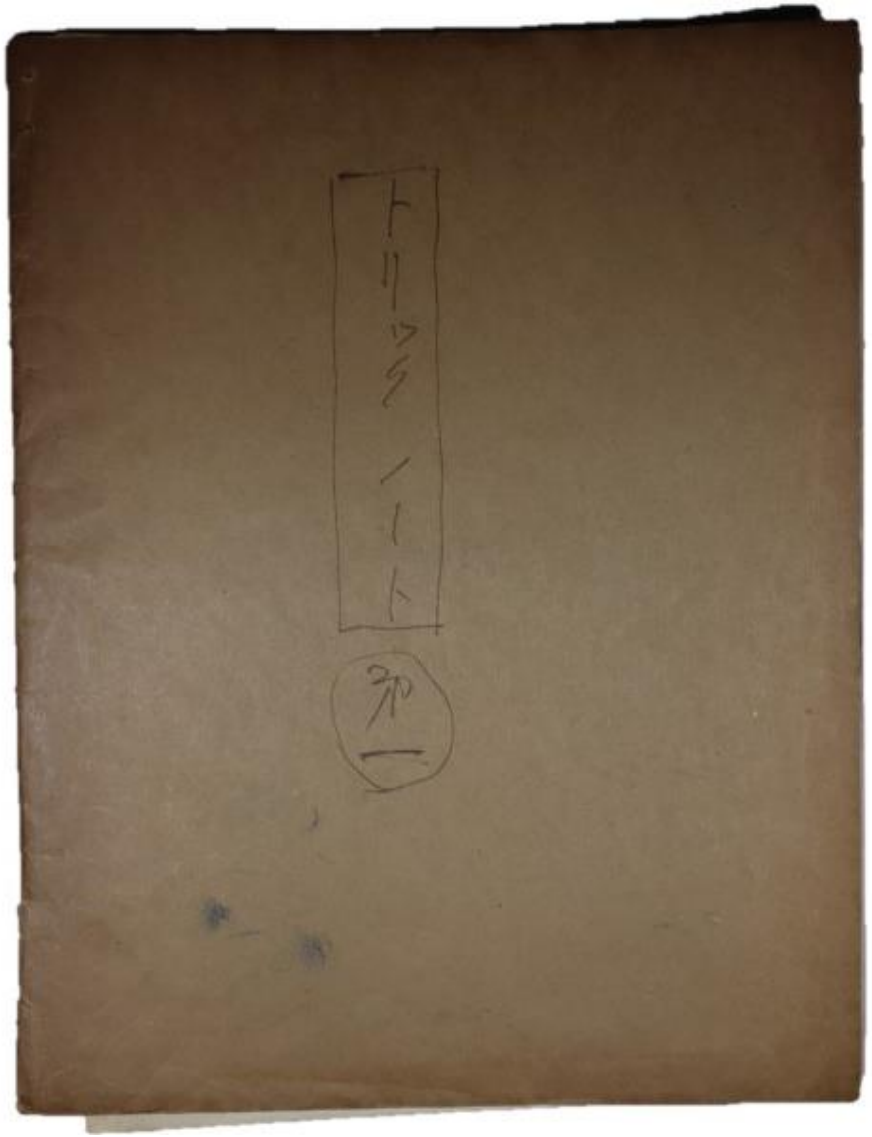
昭和21・3・23読了。
“time”の記事にて想像せし程不健康に非ず。むしろHommet, Chandlerなどよりも平凡、健康也。ニヒリズムに非ず。又plotも普通の行き方をし常識的也。諧謔の手法は優れたり。
曽我の家の喜劇の味。Carrのほどメチャクチャ茶番ニ非ず。
美人の泥酔巻舌ぶり甚だよろし。ニューヨークの猟奇の世界よく描かれ面白し。化粧、料理のこと婦人だけに描写こまかく面白し。escort bureau といふのも面白し。日本のステッキボーイ。翻訳の価値十二分也。相当売れるべし。

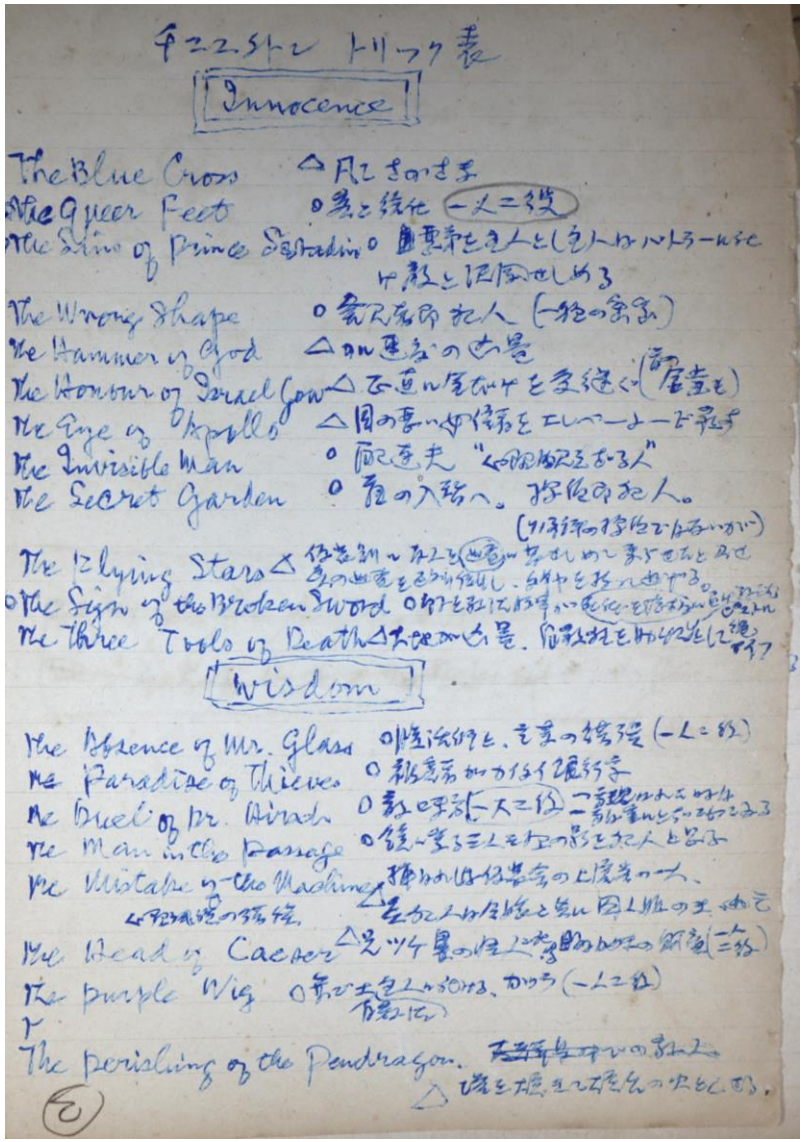
「トリックノート第一」

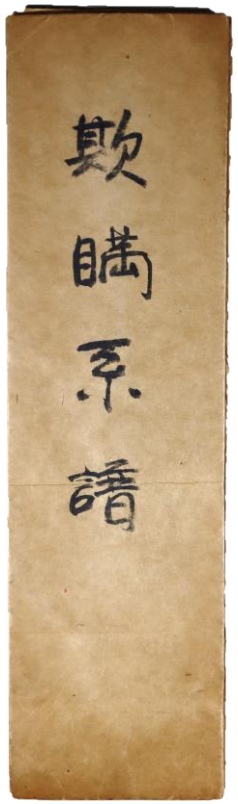
1946/1/30~

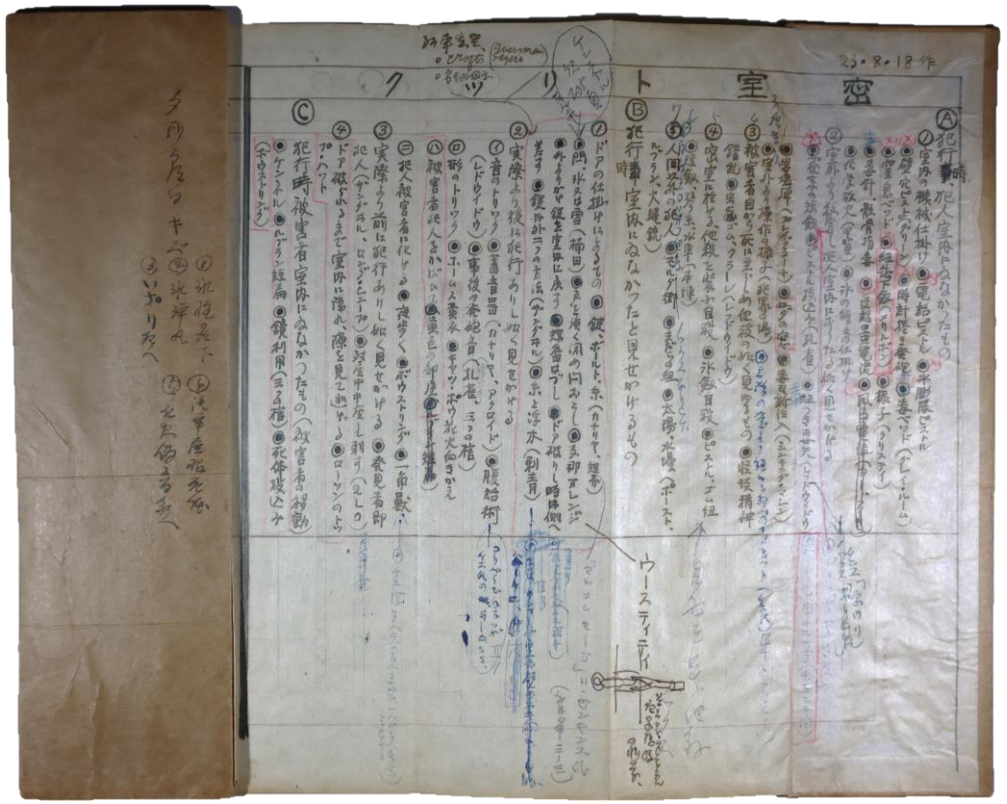
寄託資料

乱歩は欧米ミステリー小説のトリックやあらすじ、感想をノートにまとめていた。









「欺瞞系譜」

1948/8

寄託資料

「探偵小説ツリック分類表

1950/9

寄託資料

ディクスン・カー「三つの棺」の「密室講義」に触発された乱歩は国内外の探偵小説のトリックの類型化を企て、「欺瞞系譜」や「探偵小説ツリック分類表」を作成していく。

Chapter 02.

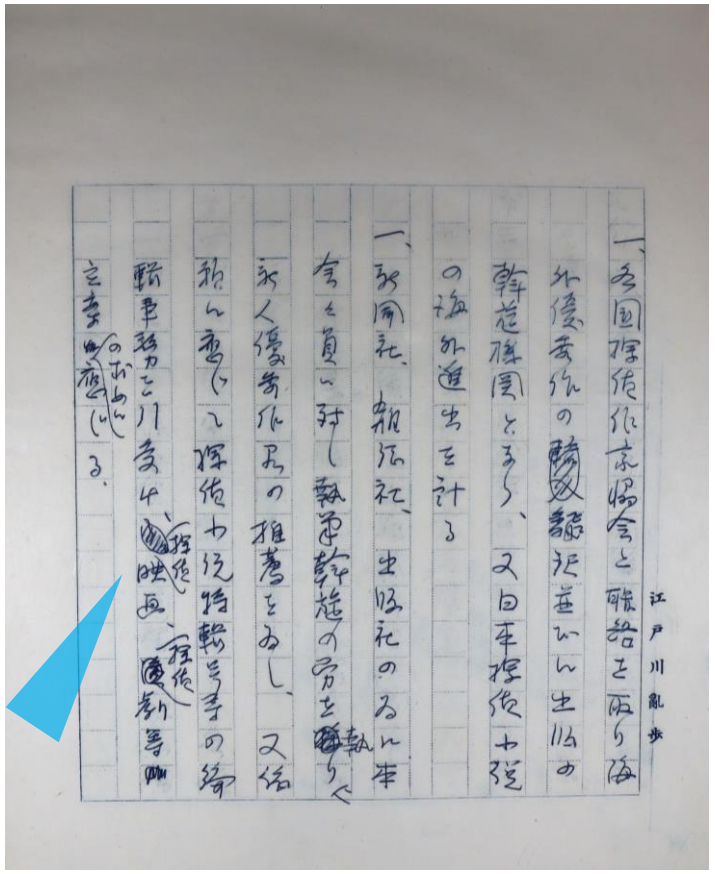
探偵作家クラブ発足期の交流

第二次世界大戦後、探偵小説の作家や愛好家たちが乱歩のもとに集まるようになった。その集会は乱歩邸では手狭になるほどの規模となり、**月1回の「土曜会」、そして探偵小説作家クラブへと発展していく。**

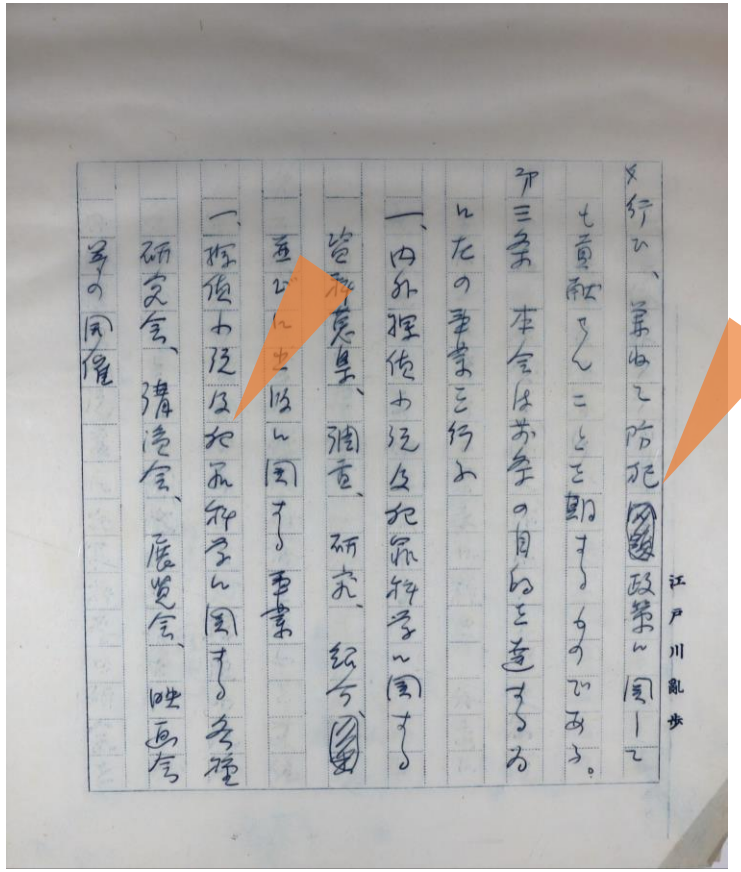
この時期の乱歩は、探偵小説界の中枢として、その組織化と活性化に尽力した。そして、旧知の作家だけではなく、**他ジャンルを中心に活躍していた作家や映画・演劇関係者、さらには司法・警察関係者まで**、様々な立場の人々をそこに巻き込んでいった。

『不連続殺人事件』で第2回「探偵作家クラブ賞」長編賞（1949年）を受賞する坂口安吾もそのひとりである。『堕落論』や『白痴』を発表し流行作家となっていた安吾が探偵小説の愛好家だと知ると、乱歩は土曜会に招待している。

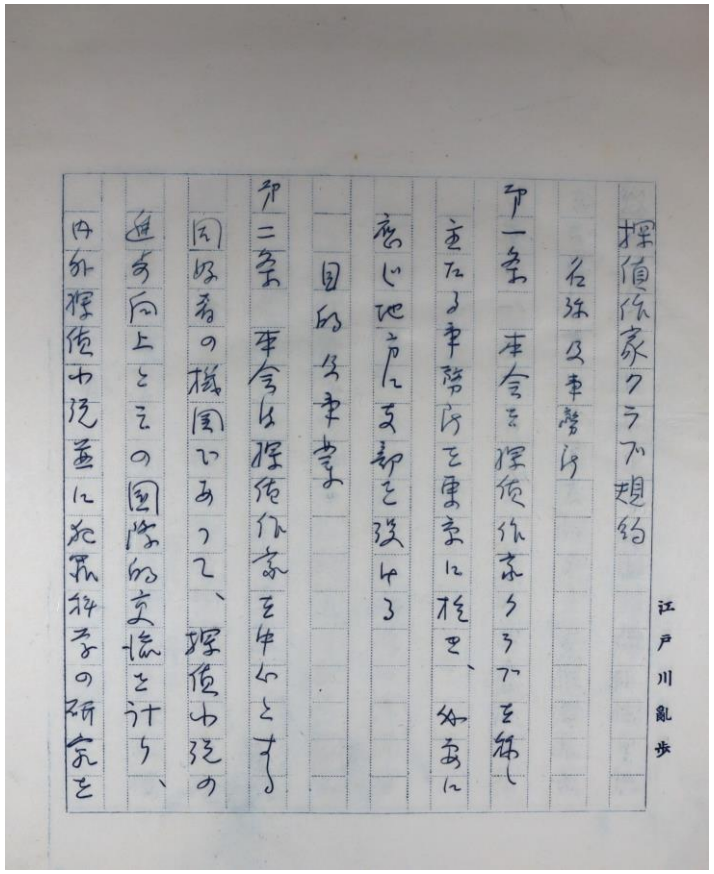
こうして新たな人脈を築く一方、乱歩は旧友の活躍にも注目していた。横溝正史が「本陣殺人事件」を完結させると、その感想を書簡で送り、評論を『宝石』誌上に発表した。また、横溝の「蝶々殺人事件」が映画化された際には、疎開中の横溝に代わって、映画スタッフとの打ち合わせを行うなど、その制作に深く関った。



3/12



2/12



1/12

江戸川乱歩「探偵作家クラブ規約」草稿控

1947/4/28-29頃記

寄託資料

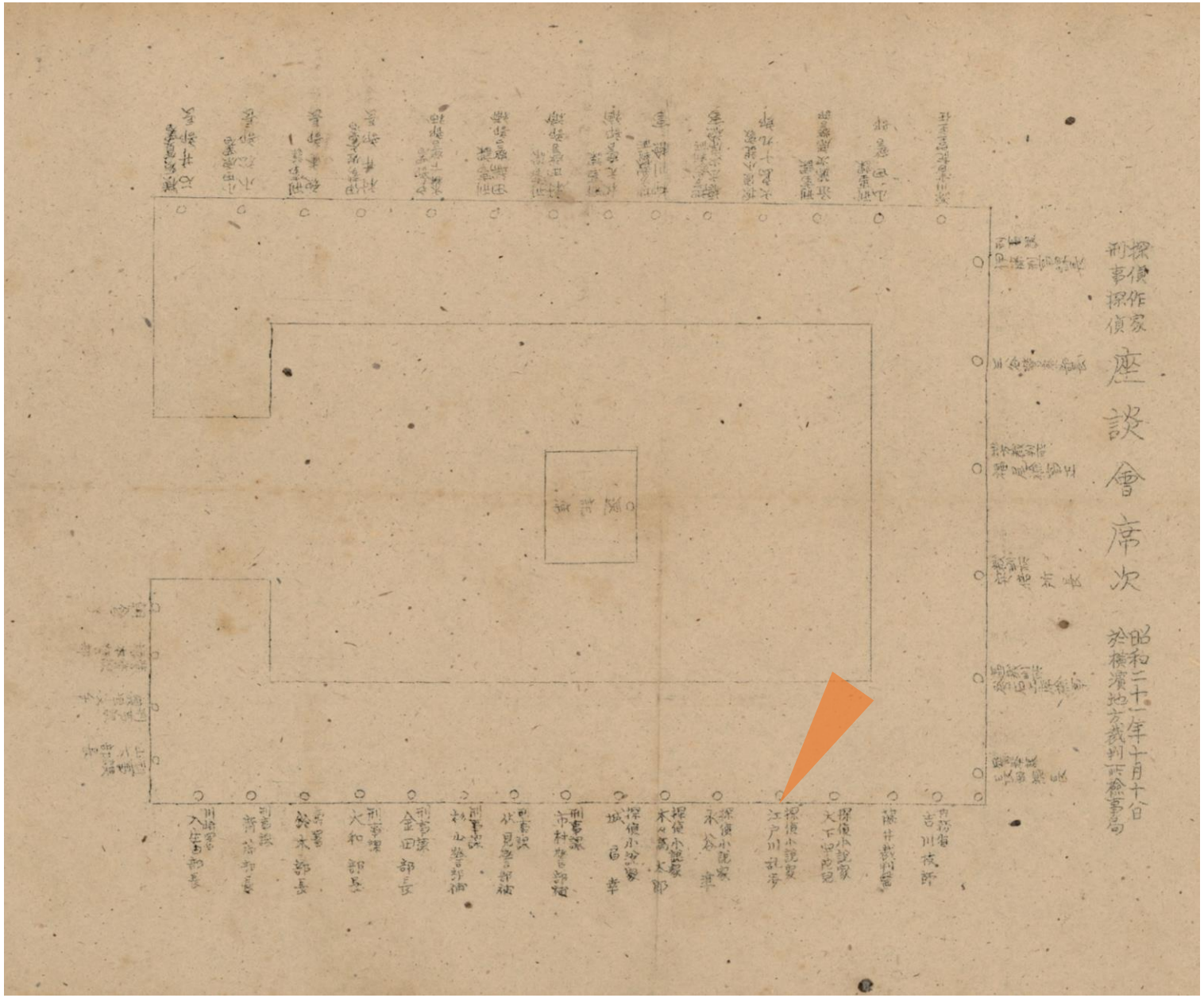
探偵作家クラブの規約には、防犯政策や犯罪化学への貢献や、映画・演劇への協力など、社会の様々な領域への順応が謳われている。

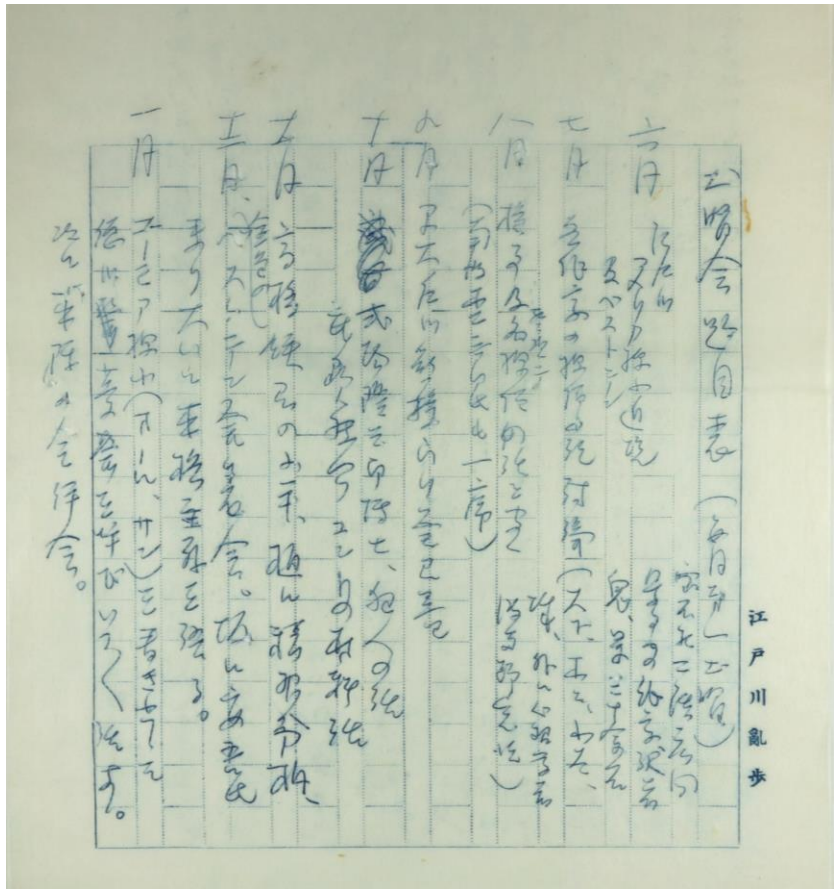
「探偵作家刑事探偵座談会席次」

1946/10/18

『貼雑年譜』第四巻　寄託資料

1946年10月18日、横浜地方裁判所にて乱歩たち探偵作家と刑事との座談会が行われた。



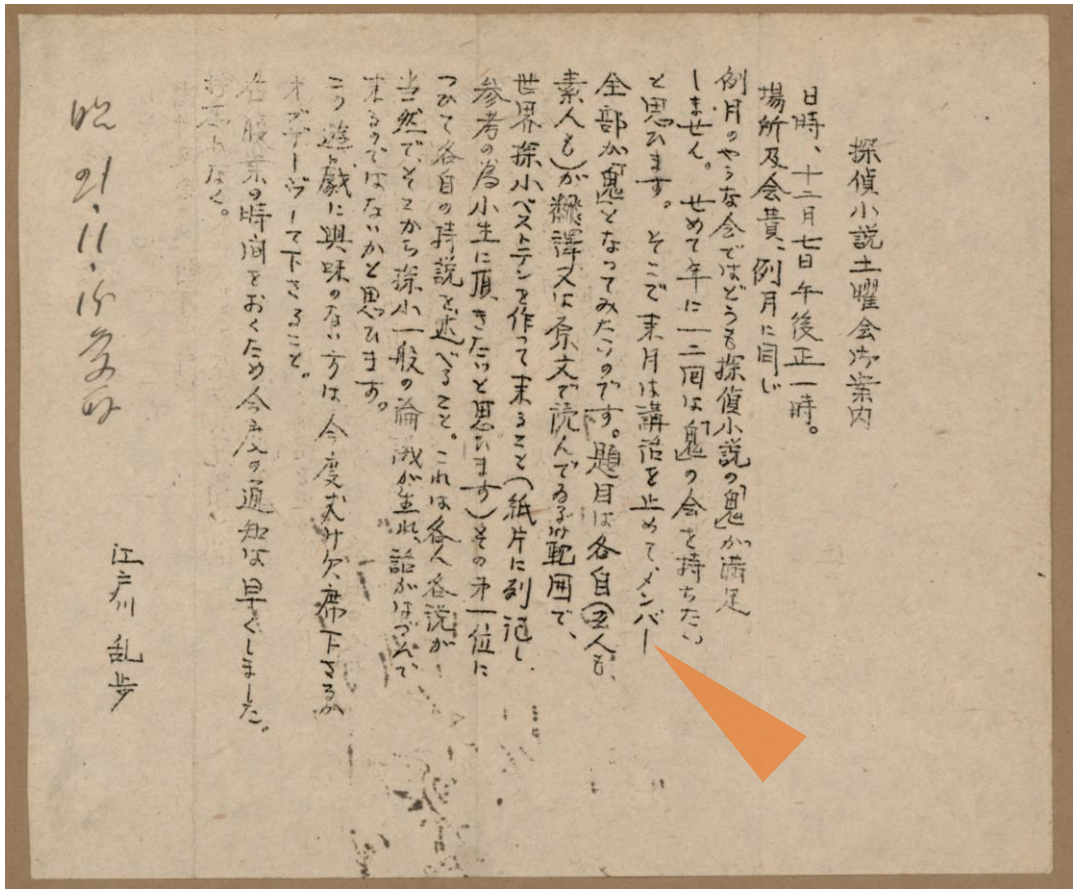


「土曜会　題目表」

1947/2頃記

寄託資料

1946年6月から翌年1月までの土曜会の内容を書いた、乱歩自筆のカーボンコピー。



「探偵小説土曜会御案内」

1946/11/15受取

『貼雑年譜』第四巻　寄託資料

1946年12月の土曜会で行われた世界探偵小説ベストテンの案内。「メンバー全部が「鬼」となつてみたいのです」と参加が促されている。

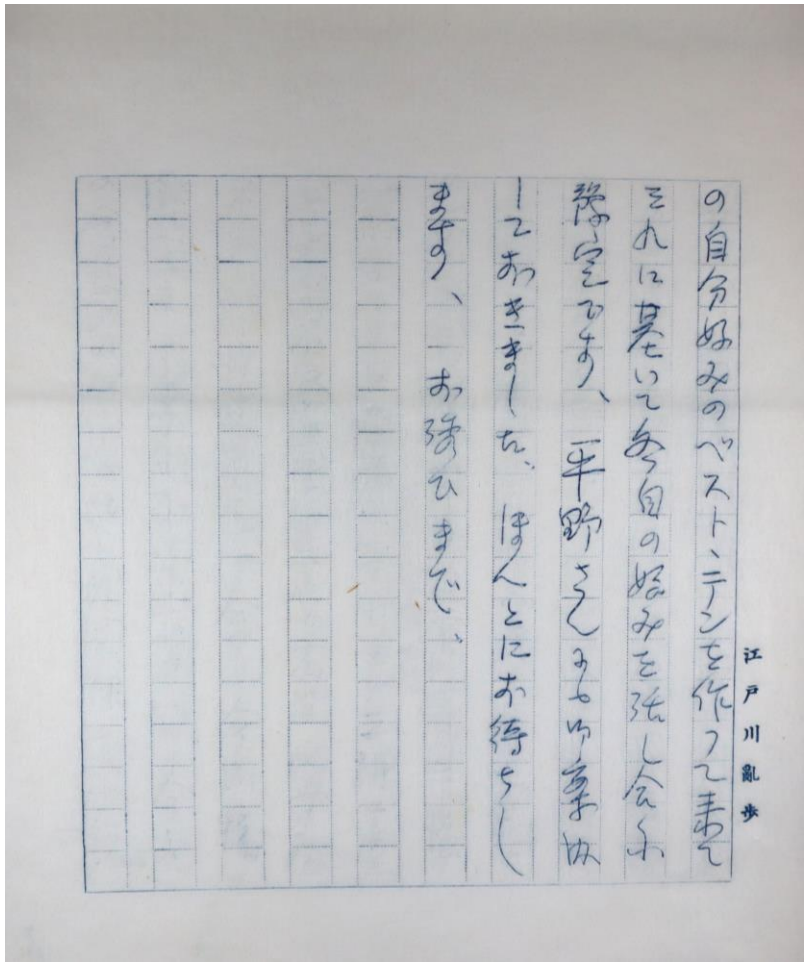
江戸川乱歩
坂口安吾宛書簡控

1946/11/27記

寄託資料

土曜会は探偵小説の作家・愛好家たちの集会であったが、旧知の仲間だけではなく、坂口安吾や平野謙などの作家・批評家も招待されていた。

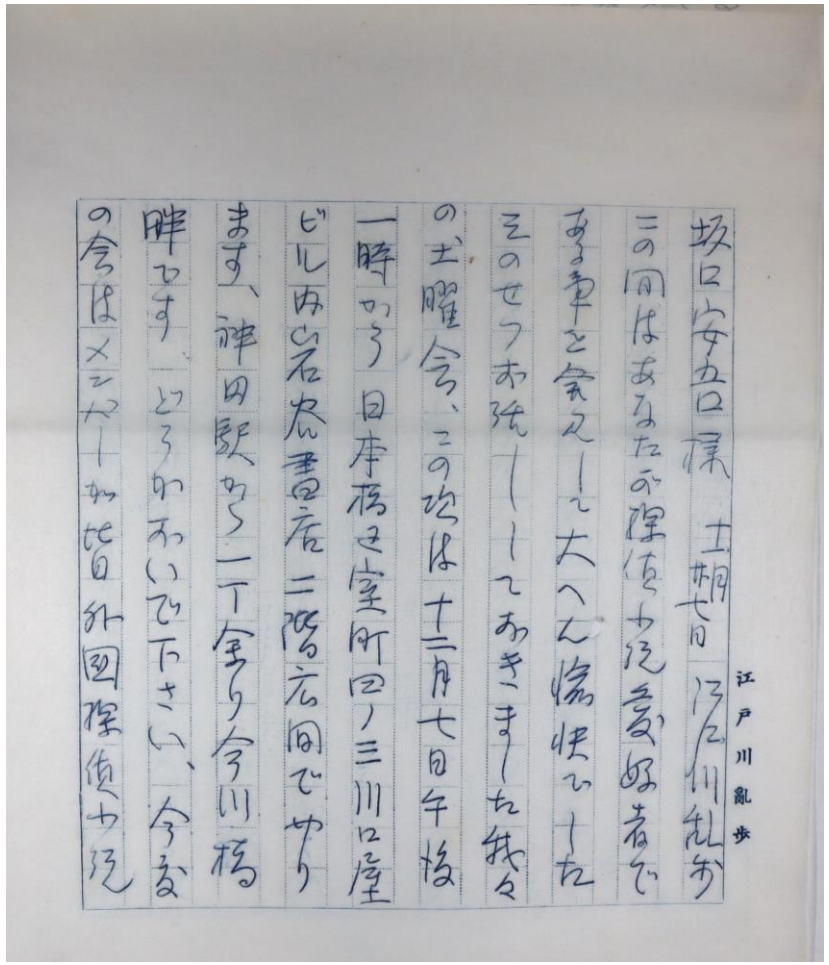
この回では、それぞれのベスト・テンに加えて、安吾による講演も行われた。



江戸川乱歩

の自分好みのベスト、テンを作って書て
それに基いて各自の好みを述し合ふ
筈です、平野さんのお家は
ておきました、ほんとにお待ちし
ます、お願ひまで、

2/2



江戸川乱歩

坂口安吾様　土曜
七日　江戸川乱歩
この回はあなたの探偵小説好き
な事を会員として大へん愉快でした
このせつお話ししておきました我々
の土曜会、この次は十二月七日午後
一時から日本橋三越所四ノ三川口屋
ビルの石原書店二階広間でやり
ます、神田駅から一丁余り今川橋
畔です、どうかおいで下さい、今度
の会はメンバーは皆外国探偵小説

1/2

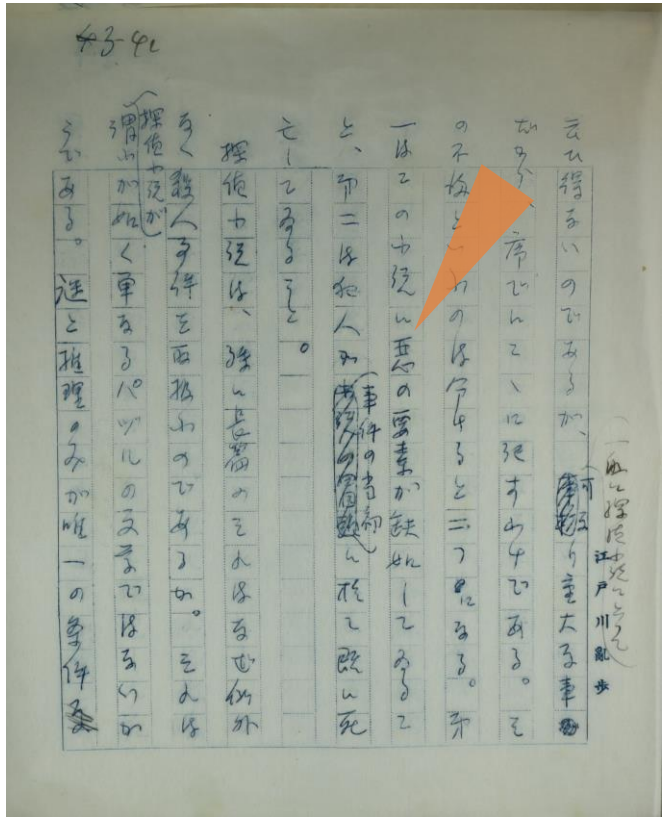
江戸川乱歩
「「本陣殺人事件」を読む」原稿控

1927/1/8記

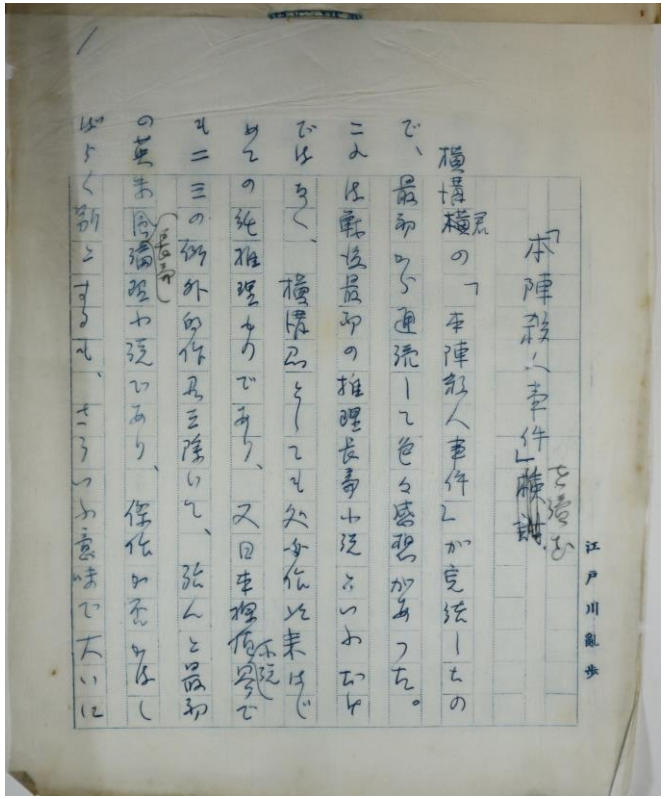
寄託資料

乱歩が横溝正史「本陣殺人事件」（『宝石』1946/1～12）について書いた評論。『宝石』（1947/2・3合併号）に掲載された。

「本陣殺人事件」の論理的手法を評価しつつ、「悪の要素が欠如してゐること」など、主に犯人の描写に関する不満が書かれている。



42/52



1/52

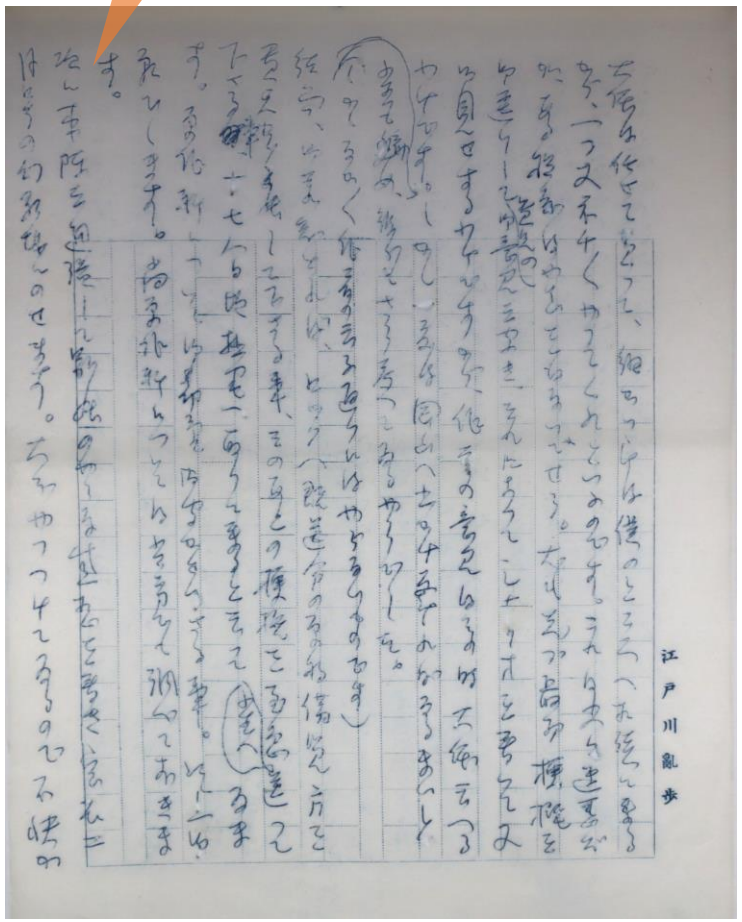
江戸川乱歩
横溝正史宛書簡控

1947/1/8記

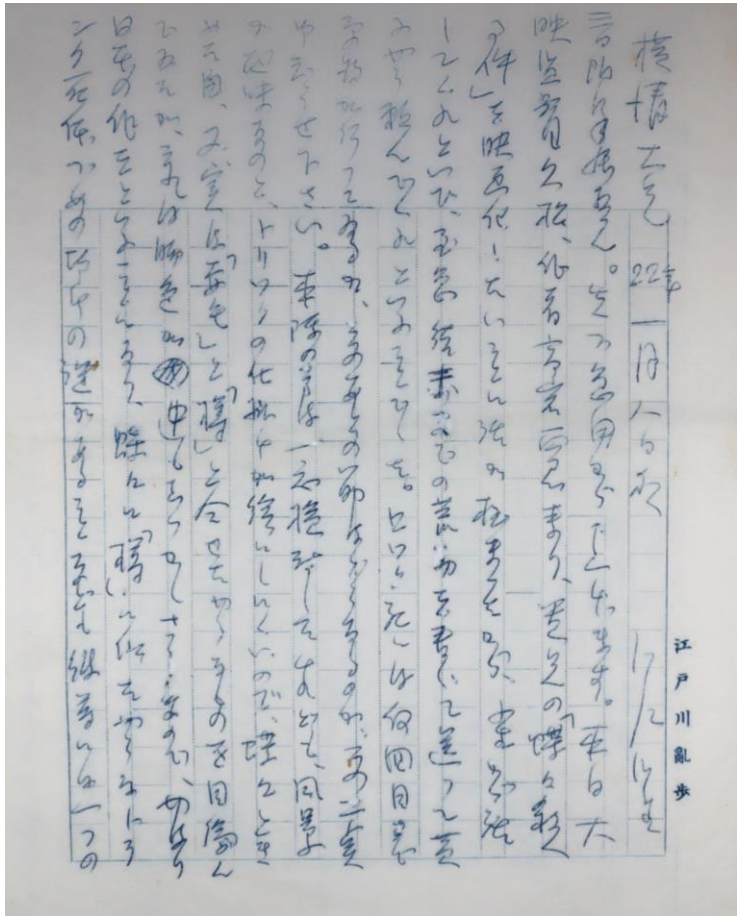
寄託資料

「「本陣殺人事件」を読む」（『宝石』1947/2・3合併号掲載）の原稿を、乱歩は横溝正史へ送り、原稿の内容を事前に伝えていた。

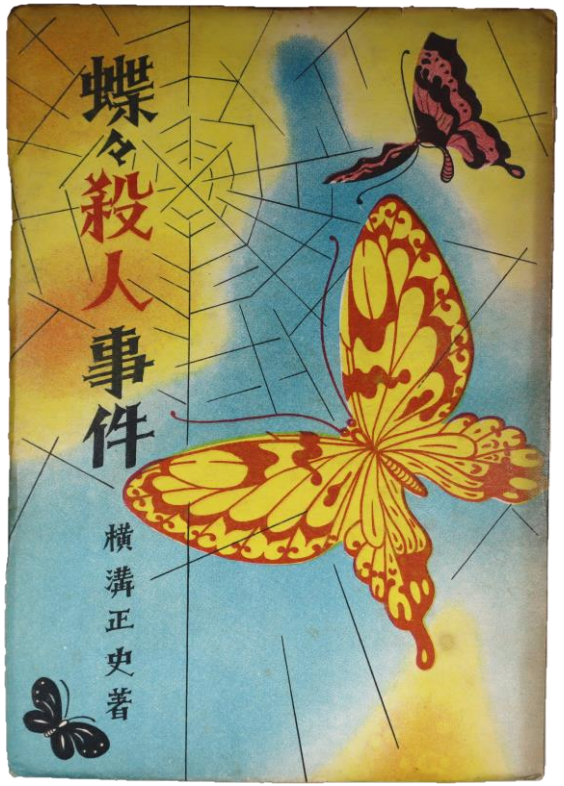
小林信彦『小説世界のロビンソン』（新潮社、1989/3）によれば、後に横溝はこの書簡について「僕は短刀を送りつけられたように感じて、ぞっとしたよ」と語ったという。

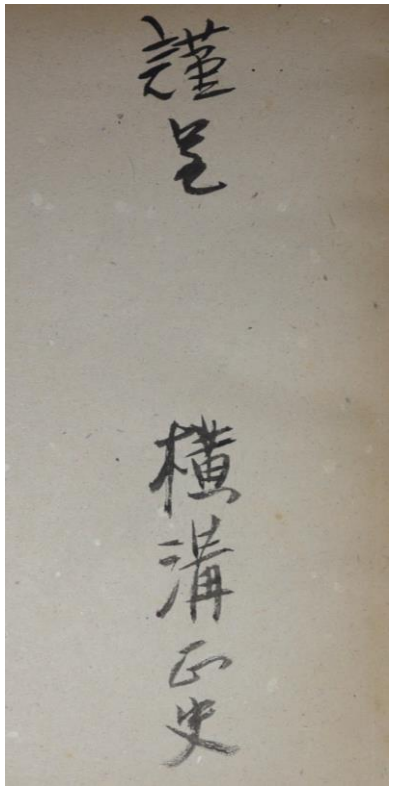


4/5



1/5

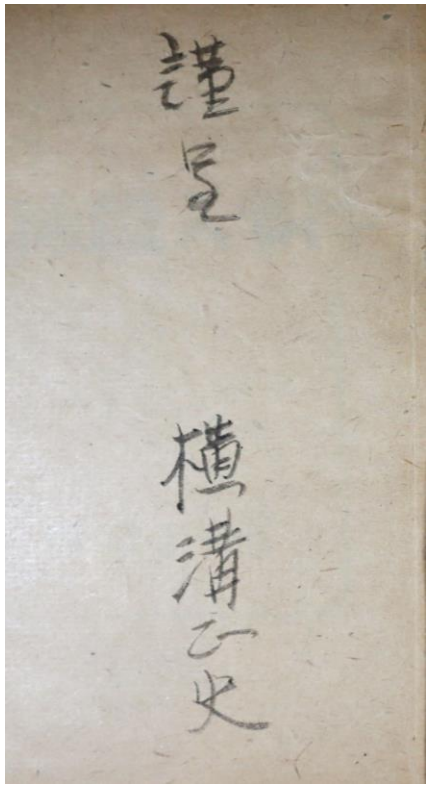




横溝正史『蝶々殺人事件』献呈署名本

月書房　1968/1
立教大学図書館蔵

大映による同作の映画化（「蝶々失踪事件」1947年12月23日公開）の際、乱歩は構成補導を担当した。



横溝正史『本陣殺人事件』献呈署名本

青珠社　1967/11
立教大学図書館蔵

横溝正史が乱歩に宛てた署名本。

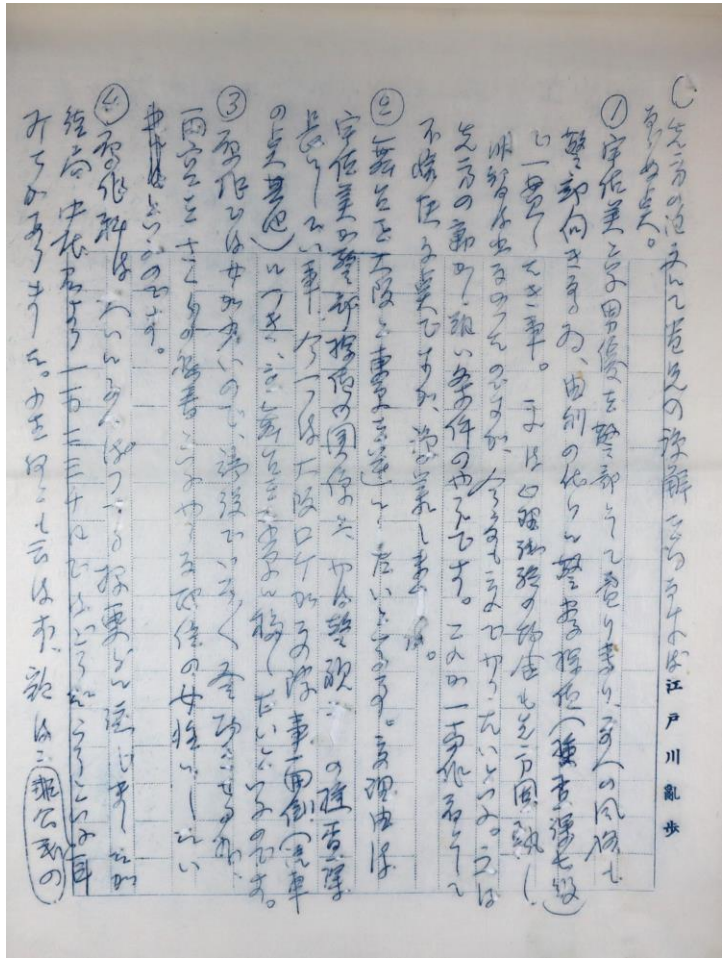
江戸川乱歩
横溝正史宛書簡控

1947/2/18記

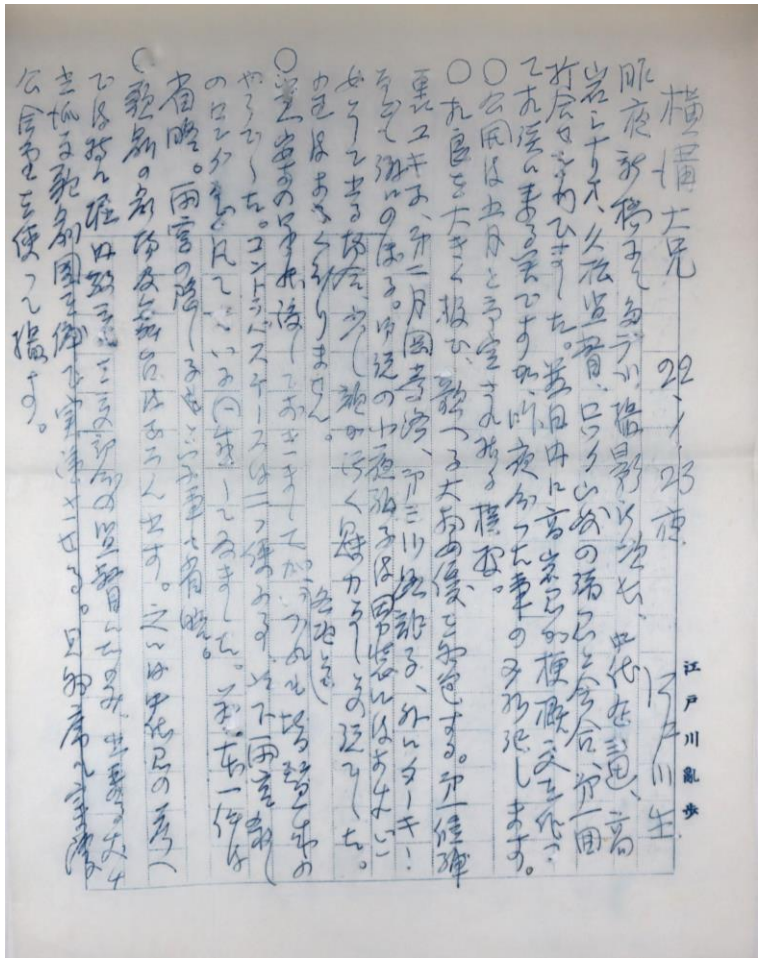
寄託資料

乱歩は大映映画「蝶々失踪事件」のスタッフや「蝶々殺人事件」の掲載誌『ロック』の山崎徹也編集長と数回打ち合わせを行い、その内容を岡山県に疎開していた横溝に報告・相談している。

この書簡には、登場人物や舞台の変更を大映側に注文されたことなどが書かれている。



2/3



1/3

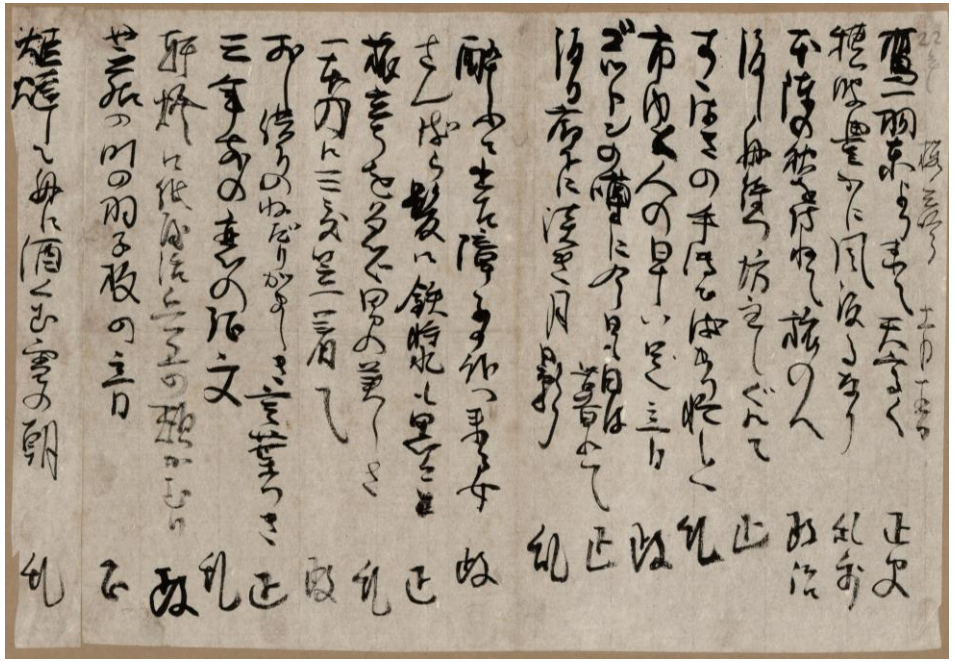
江戸川乱歩・横溝正史・西田政治「桜三吟」

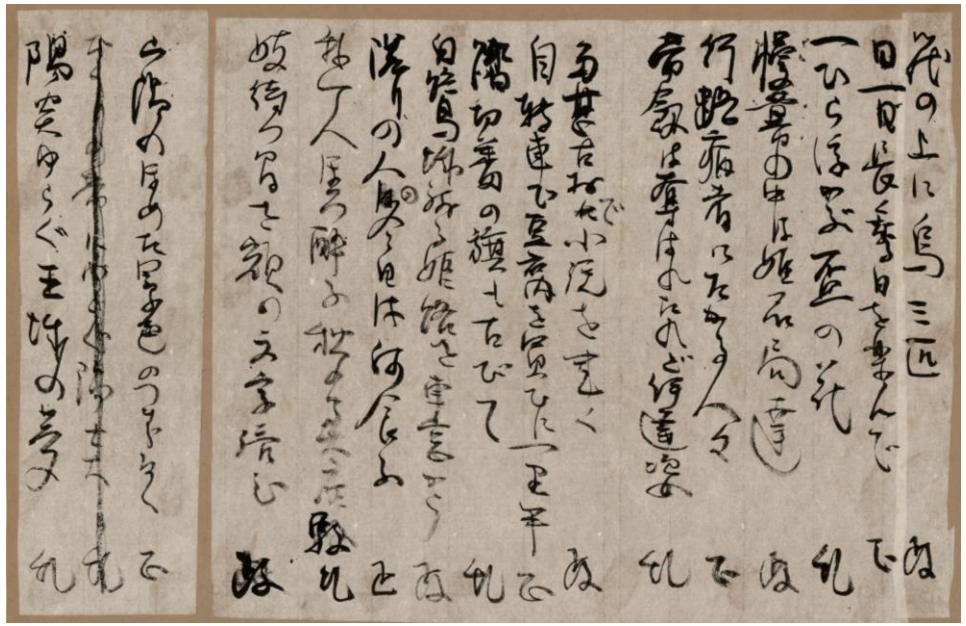
1947/11/15記

『貼雑年譜』第4巻　寄託資料

1947年11月、乱歩は翻訳家の西田政治とともに岡山県の横溝正史を訪ね、滞在最終夜には3人で連句を巻いた。

『探偵小説四十年』には、「その夜は横溝、西田、私の三人で「桜三吟」と題する歌仙（連句）を巻いた。三人ともろくに法則も知らなかったのだから、変なものができ上がったが、三時間ほどでともかく一巻を仕上げた」とある。





Chapter 03.

新風ショウ「レヴュー殺人事件」

1947年、新風ショウによって**「レヴュー殺人事件」**が上演された。この大衆演劇の原案には江戸川乱歩、大下宇陀児、木々高太郎、海野十三、角田喜久雄、水谷準、城昌幸の7名が原案に名を連ねている。

この原案は探偵作家クラブとしての事実上最初の活動であり、その謝礼は**探偵作家クラブの発足期を支える資金**となった。

しかし、乱歩たち探偵作家が「レヴュー殺人事件」に関してメディアで言及することはほとんどなかった。彼らにとって上演された舞台は不本意な出来であったのかもしれない。

しかし、乱歩旧蔵資料からは、この仕事を持ちかけたであろう加賀四郎らと探偵作家たちとの間に入り、合同原作者の中心として奮闘する乱歩の姿を見出すことができる。

〔参照〕米山大樹「江戸川乱歩旧蔵資料にみる探偵作家クラブの出発：「レヴュー殺人事件」脚本と乱歩直筆原案を調査する」（『大衆文化』2021/3）

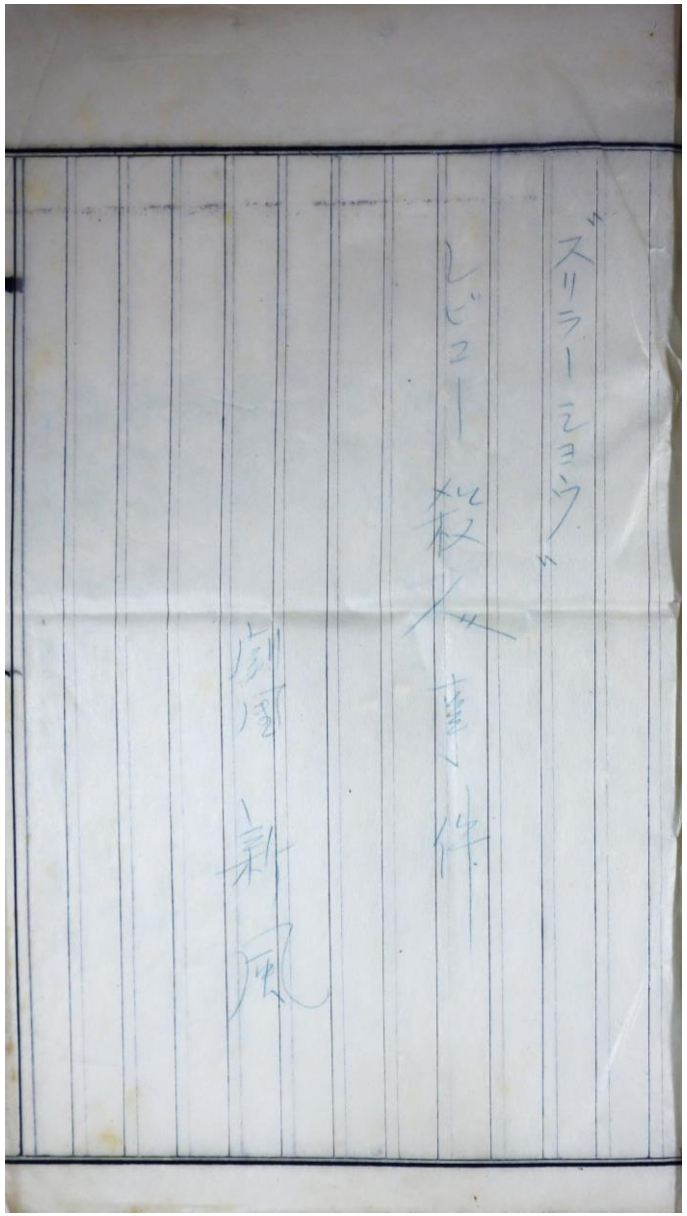
「レヴュー殺人事件」脚本

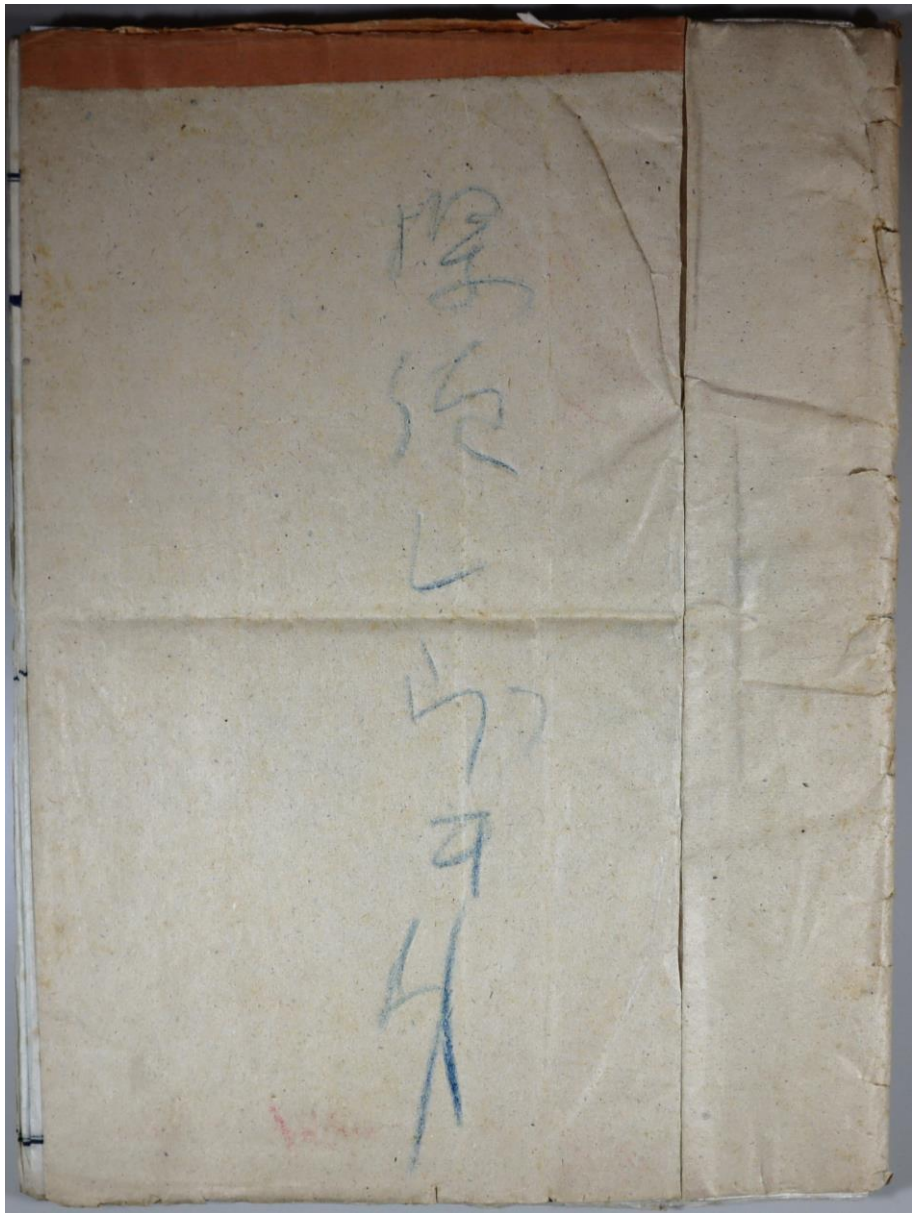
1947

寄託資料

カーボン複写の脚本稿を製本したもの。

藁半紙の表紙の「探偵レヴヰー」という文字は乱歩によって書かれたものだと思われる。





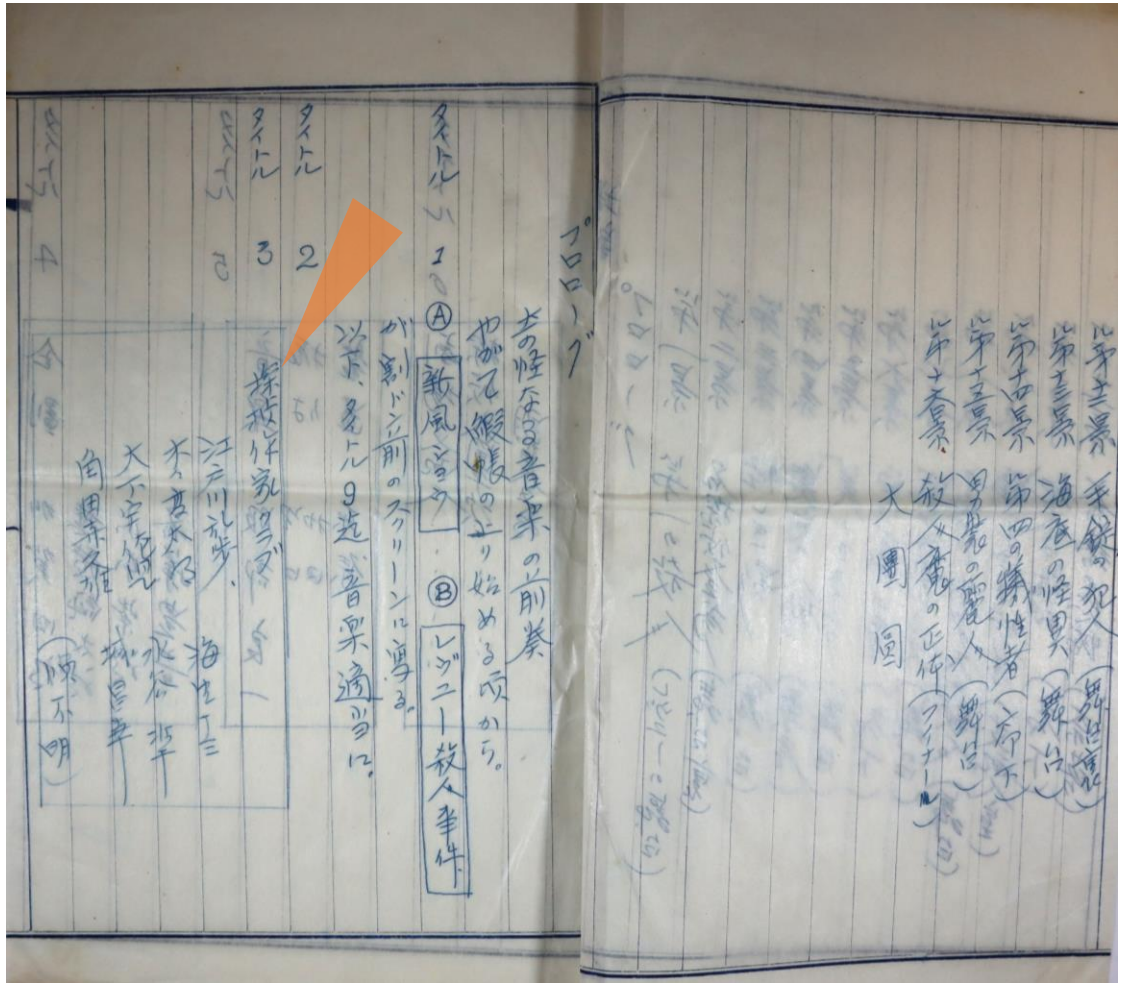
「レヴュー殺人事件」脚本

1947

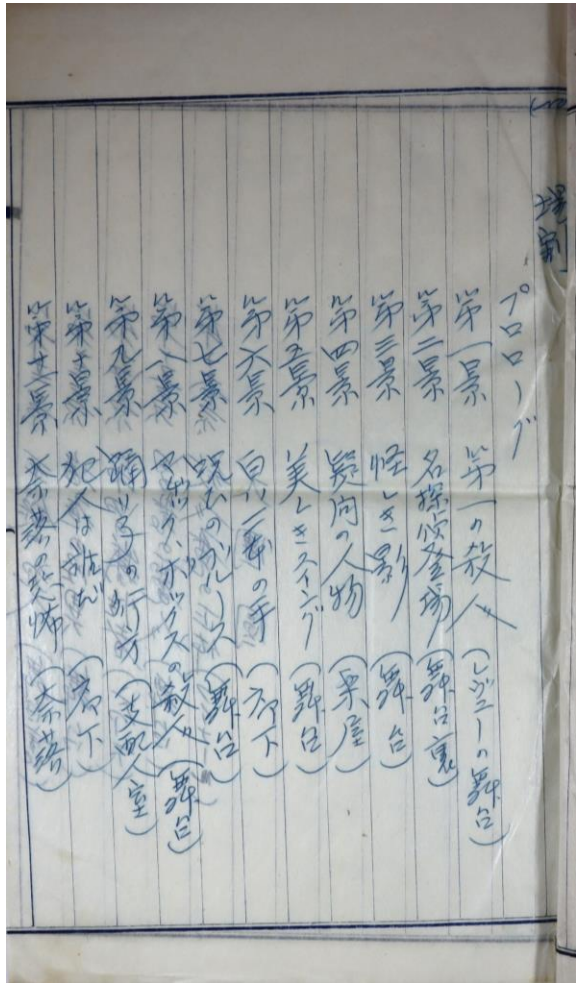
寄託資料

原案者7名の名前の前に「探偵作家クラブ」と書かれている。

このタイトルがスクリーンへ映されたのであれば、発足前の探偵作家クラブの名を世間に示したかなり早い事例と言える。



2丁裏-3丁表



2丁表

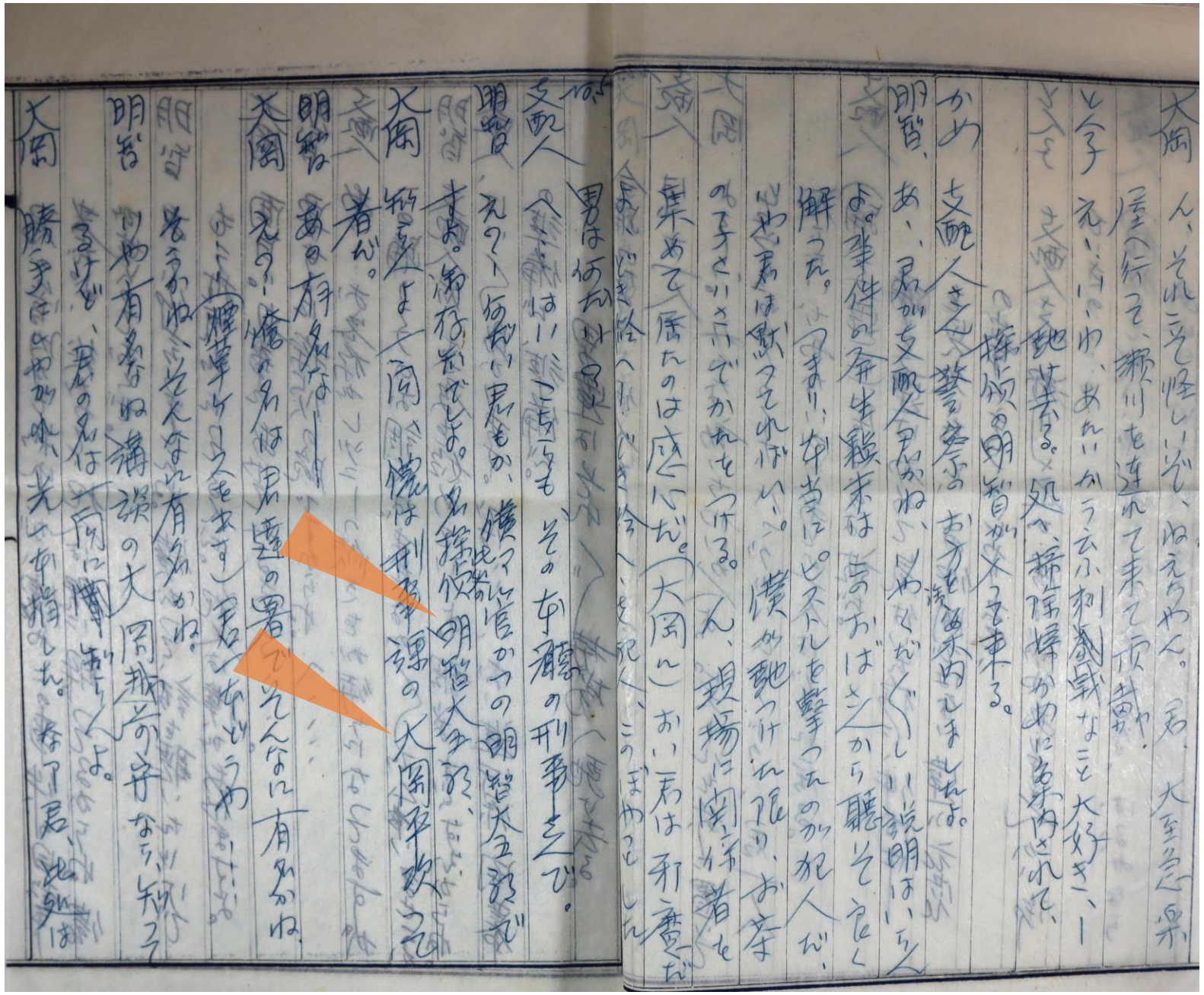
「レヴュー殺人事件」脚本

1947

寄託資料

劇の内容は、レヴューがまさに上演されている舞台上で次々と殺人事件がおこるが、それはすべて劇団の仕組んだ〈宣伝〉だった、というもの。

明智大五郎と大岡平治というユニークな名前のふたりの警察官が事件解決に奔走する。



7丁裏-8丁表

「レビュー殺人事件」劇場公演についての広告と記事

『貼雑年譜』第四巻　寄託資料

『夕刊新大阪』に掲載された梅田映画劇場公演の広告には、出演者として歌手の淡谷のり子をはじめ、新風ショウの喜劇俳優・伴淳三郎と藤尾淳らの名前が書かれている。

・「レヴュー殺人事件」広告
（『夕刊新大阪』1947/3/14）

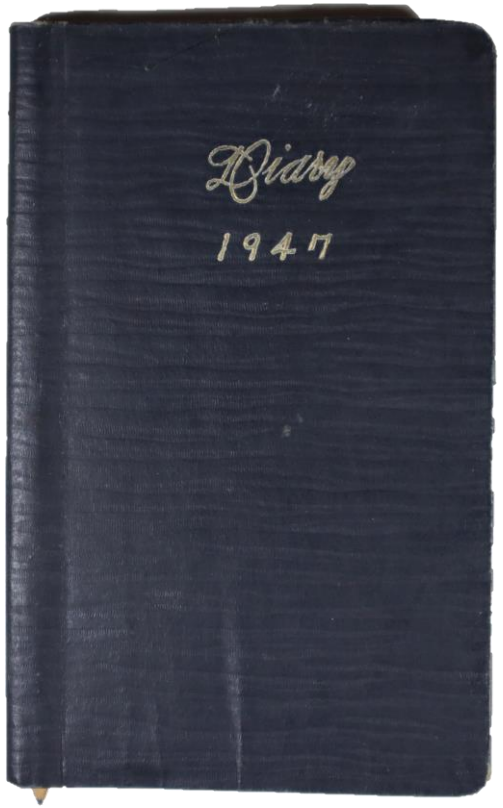
・「レヴュー殺人事件」
（『夕刊新大阪』1947/3/14）

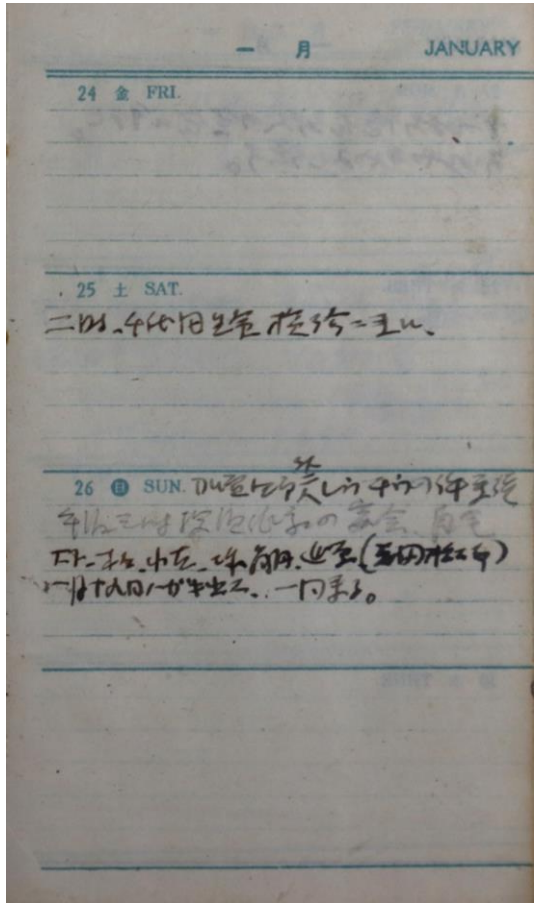
・「レヴュー殺人事件」広告
（『読売新聞』朝刊　1947/5/21）

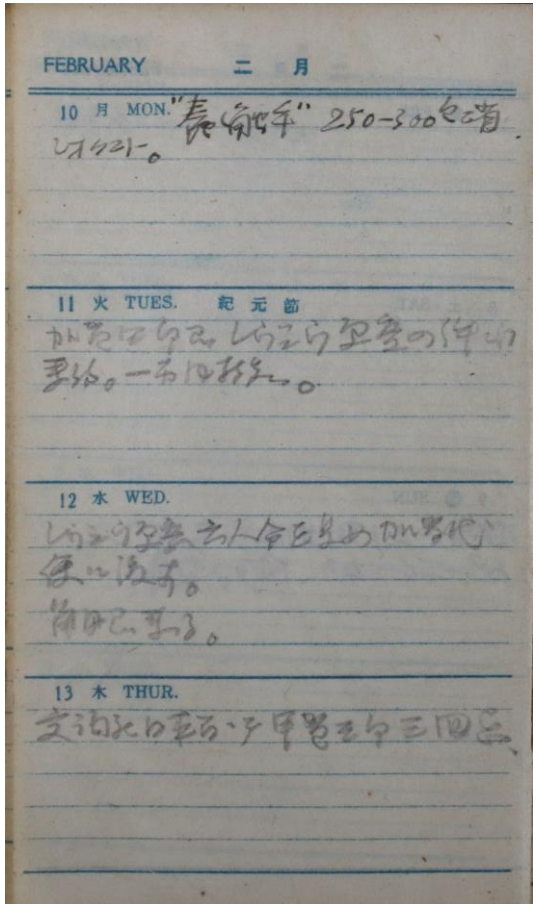
「Diary　1947」

1947

当時の乱歩が使用していた手帳には、1月26日に加賀四郎らから「レヴュー殺人事件」の原案を依頼され、2月11日に原案料1万円を受け取り、翌12日に集めた原案を渡すという日程が記録されている。







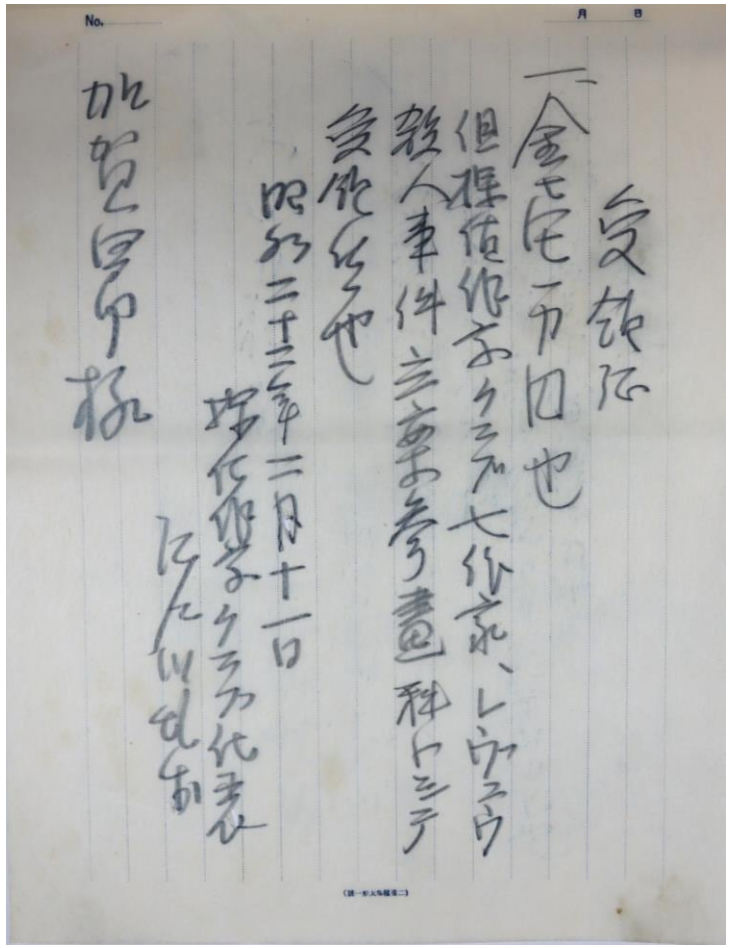
「受領証控」

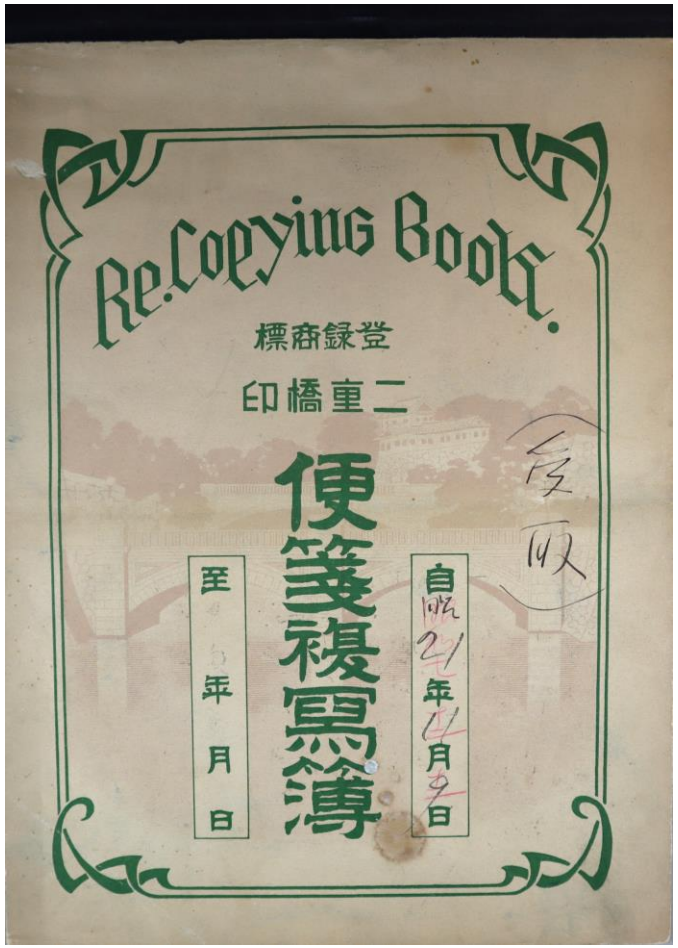
1946/11/9～1947/7/9

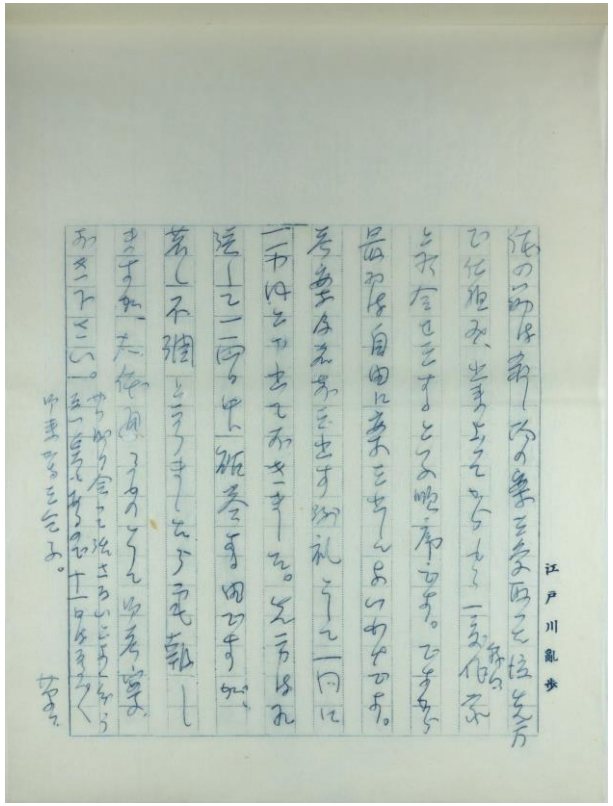
寄託資料

1947年2月11日に加賀四郎から原案料1万円を受け取った際の受領証の控え。

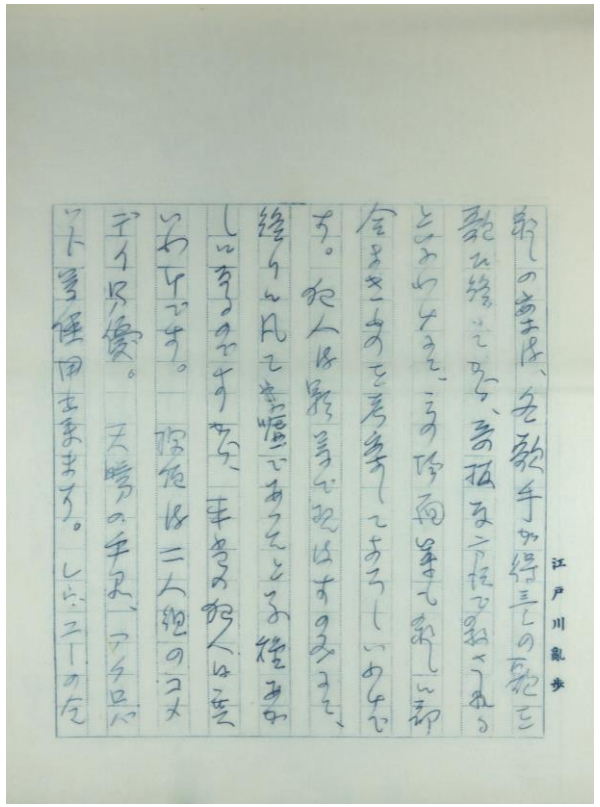
「探偵作家クラブ代表」として乱歩が受領している。



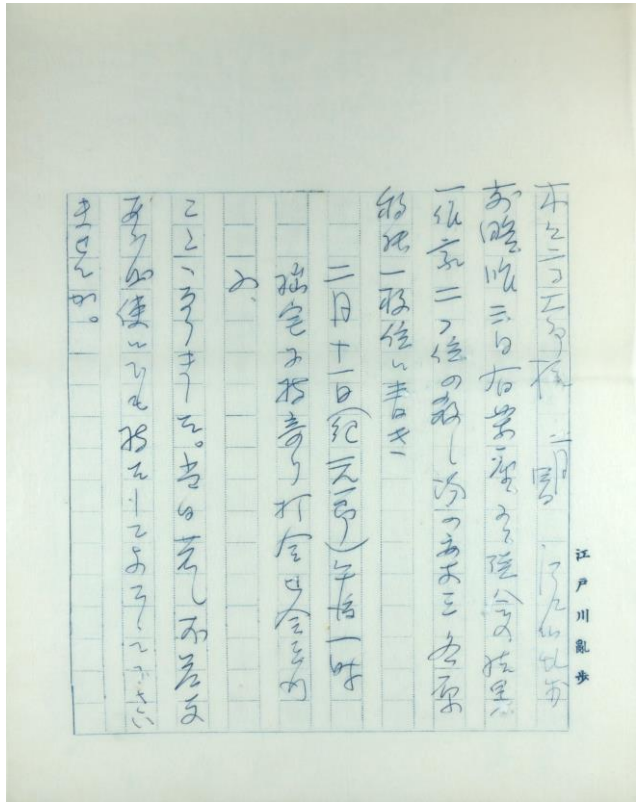




3/3



2/3



1/3

江戸川乱歩
木々高太郎宛書簡控

1947/2/4記

寄託資料

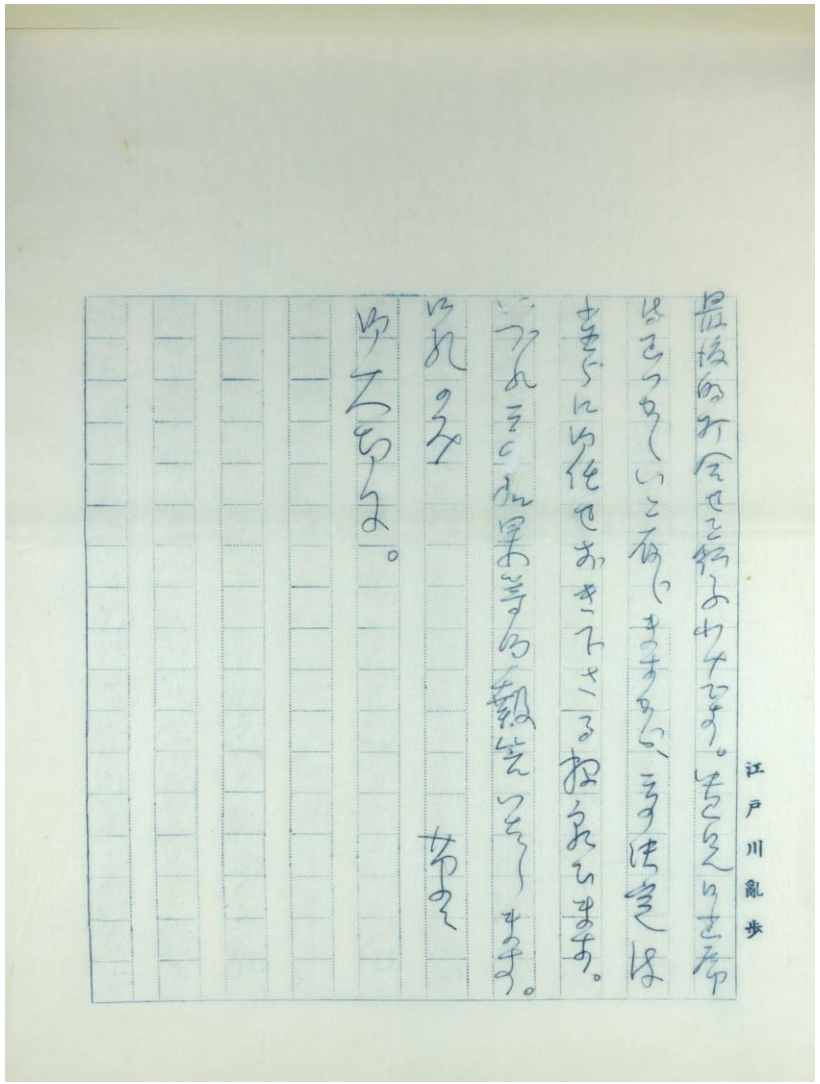
1947年2月11日に「レヴュー殺人事件」原案の打ち合わせのための連絡と、その後の流れが書かれている。

江戸川乱歩
海野十三宛書簡控

1947/2/12記

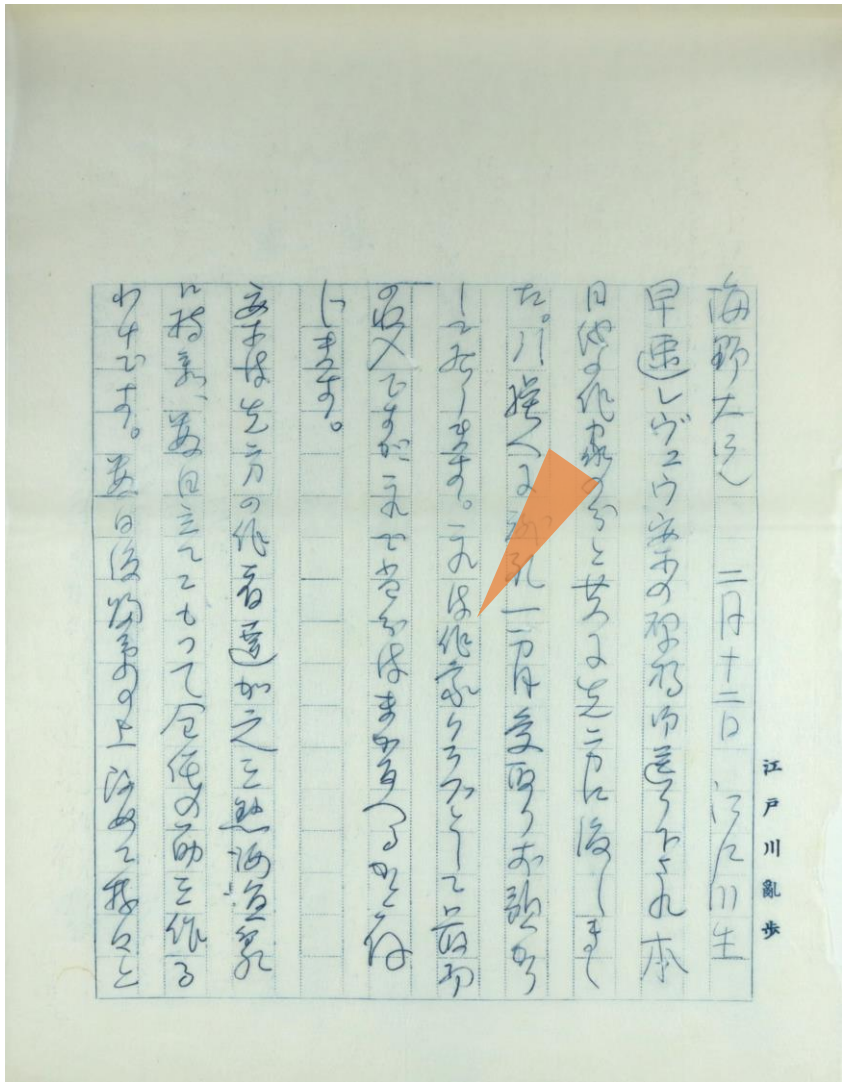
寄託資料

「レヴュー殺人事件」の原案で得た謝礼1万円が「探偵作家クラブとして最初の収入」であり、これでクラブの活動資金を「まかなへる」と書かれている。



江戸川乱歩

2/2



江戸川乱歩

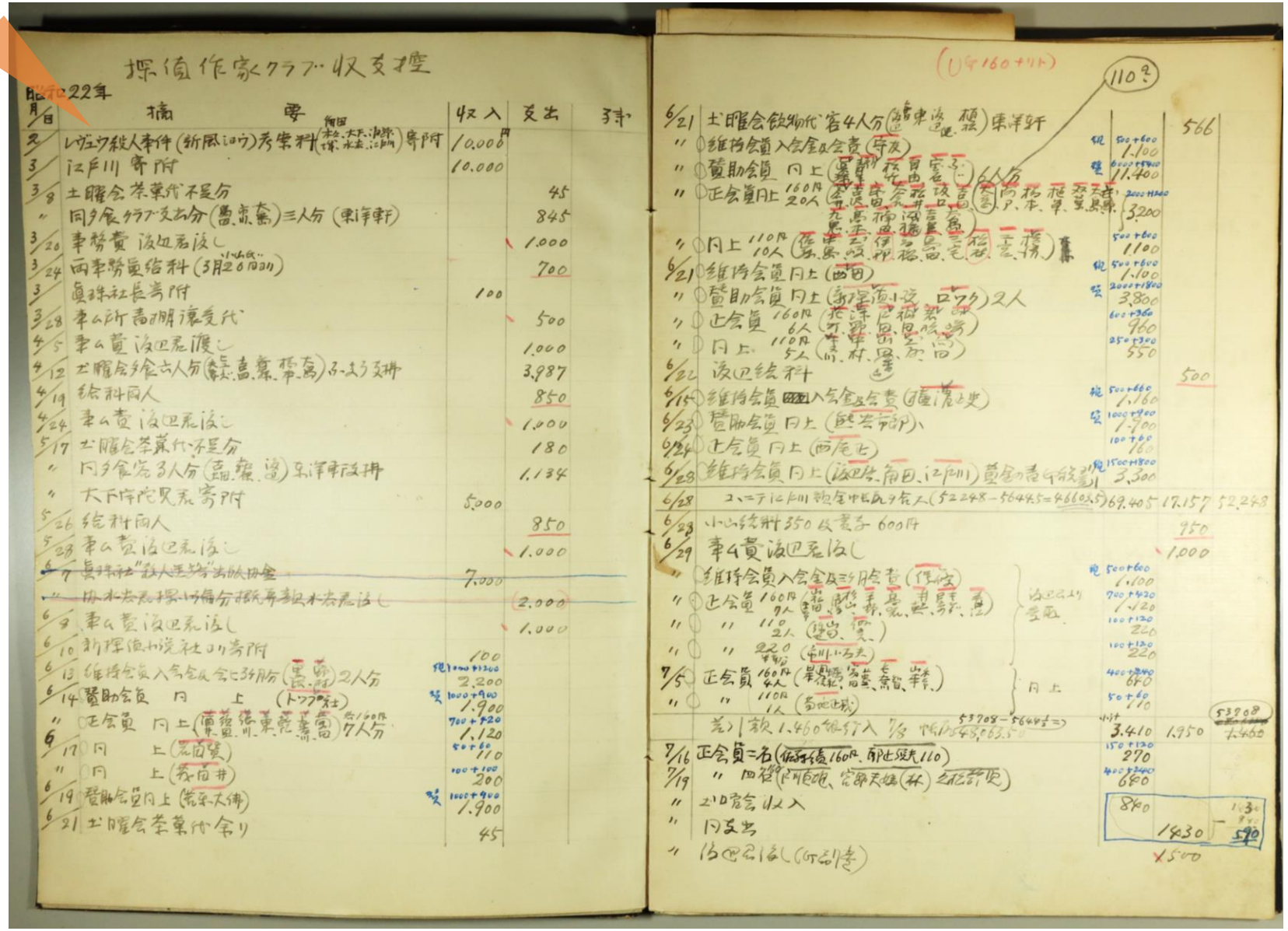
1/2

「探偵作家クラブ収支控」

1947/2〜

寄託資料

「レヴュー殺人事件」の原案料1万円と翌3月に乱歩が寄付した1万円が事務費や人件費にあてられ、探偵作家クラブ発足時の運営費用となっていたことが分かる。



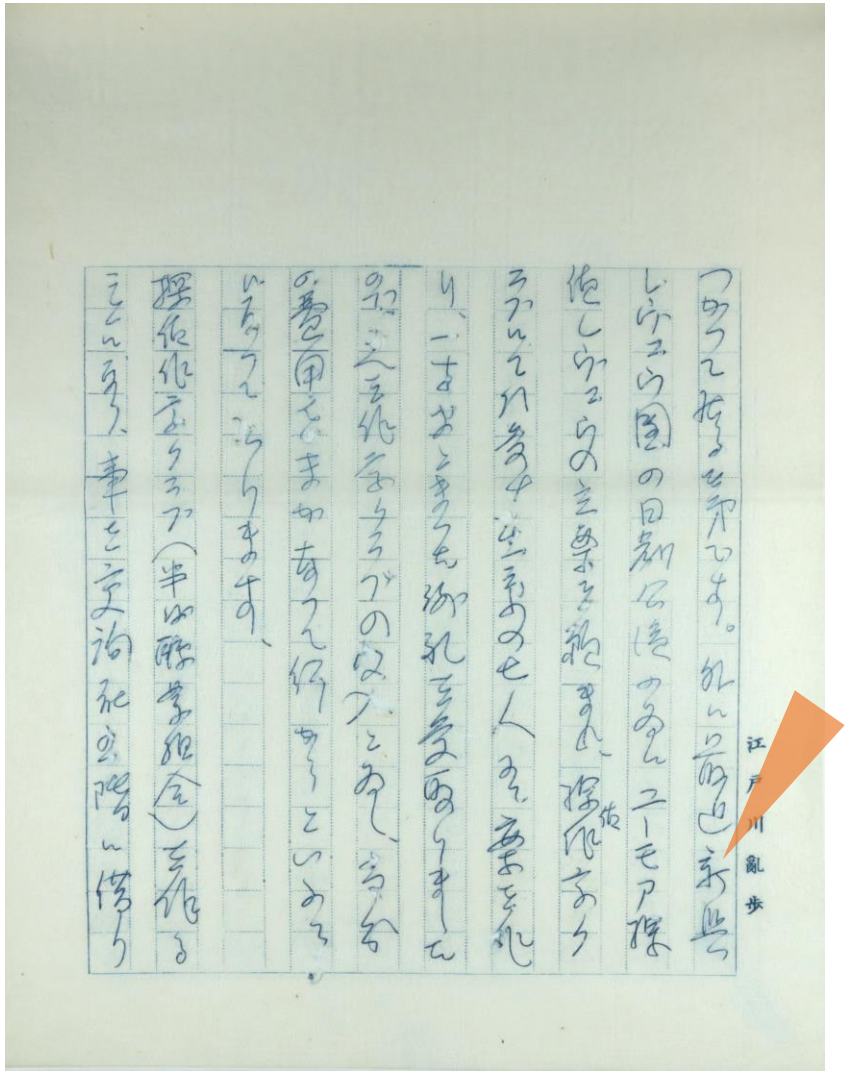
江戸川乱歩
森下雨村宛書簡控

1947/2頃記

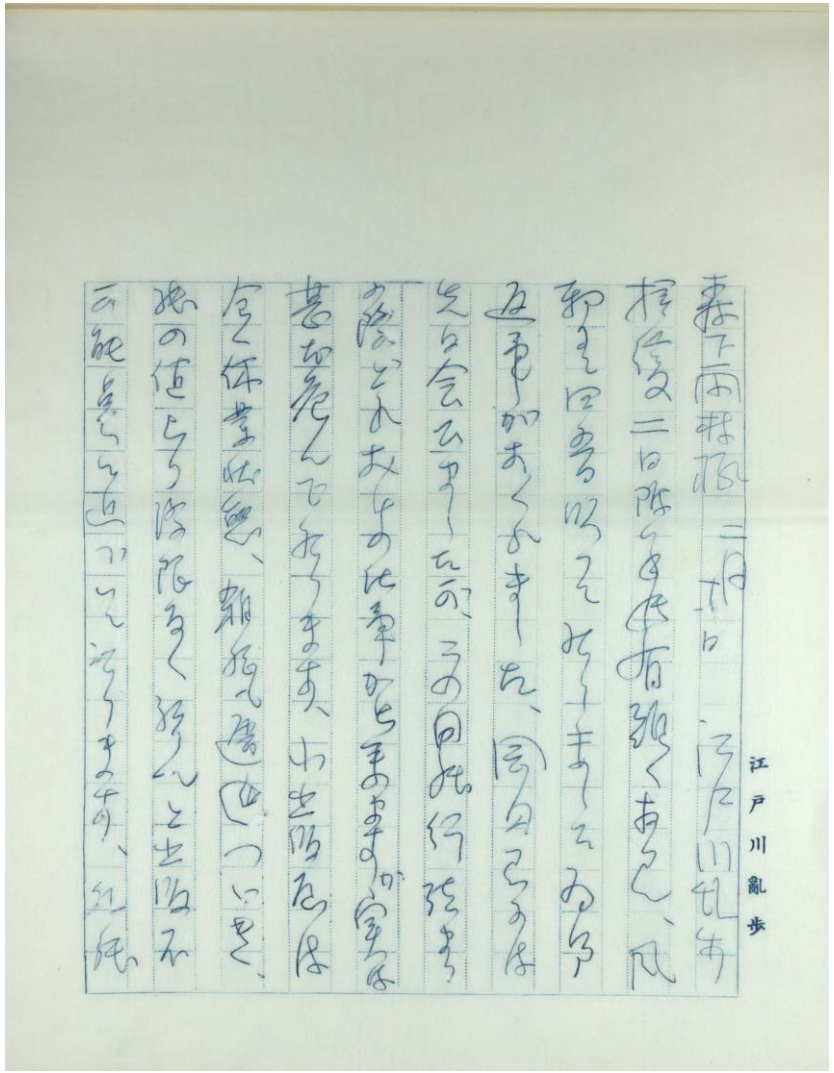
寄託資料

「新興レヴュー団の日劇公演」とある。

「レヴュー殺人事件」は日本劇場での公演が構想されていたのだろうか。



4/8



1/8

Chapter 04.

「レヴュー殺人事件」乱歩直筆原案

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターに寄託されている江戸川乱歩発書簡控のなかには、部分的に**原稿や草稿、構想メモ**などが記されているものがある。**「レヴュー殺人事件」の原案**もそのひとつだ。

乱歩の「発書簡控　昭和22年1月29日～1月25日」には、「レヴュウの殺人のレヴュウの案／二月十一月夜案／明十二日加賀氏使に渡す」として、「A案」から「E案」まで5つの原案が15枚にわたって記録されている。

木々高太郎宛書簡で「一作家二つ位の殺し場の案を各原稿紙一枚位に書き」と指定していたことを考えれば、この分量は、作家の熱意を証明するのに十分であろう。

乱歩による原案では、女性歌手が舞台上で殺害される場面が、**舞台という空間と明暗や奥行きを利用したトリック**によって演出されてる。

大衆演劇の原案に携わるにあたり、乱歩はどのような関心を抱いていたのか。「レヴュー殺人事件」乱歩直筆原案に書かれた様々なアイデアは、この時期の乱歩の構想に接近するための数少ない手掛かりとなる。

〔参照〕米山大樹「江戸川乱歩旧蔵資料にみる探偵作家クラブの出発：「レヴュー殺人事件」脚本と乱歩直筆原案を調査する」（『大衆文化』2021/3）

「レヴュー殺人事件」原案

1947/2/11記

「発書簡控　昭和22年1月29日～1月25日」寄託資料

A案の「巨人の短剣」は、強力な光線によって背景に作られた巨大な影が、女性歌手を刺し殺すというもの。

〔「レヴュー殺人事件」乱歩原案1枚目〕

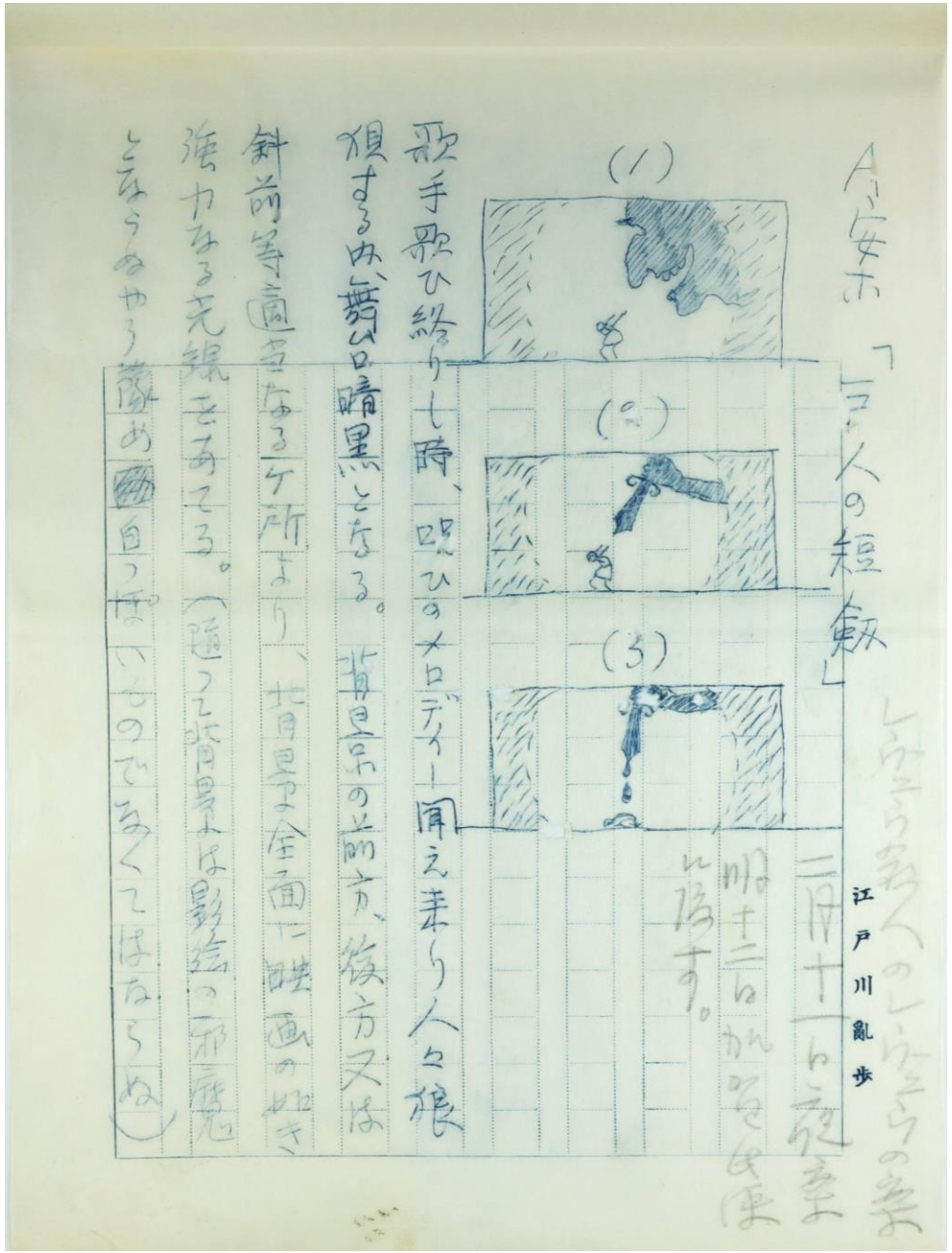
レヴュウの殺人のレヴュウの案

A案「巨人の短剣」

二月十一月夜案

明十二日加賀氏使に渡す。

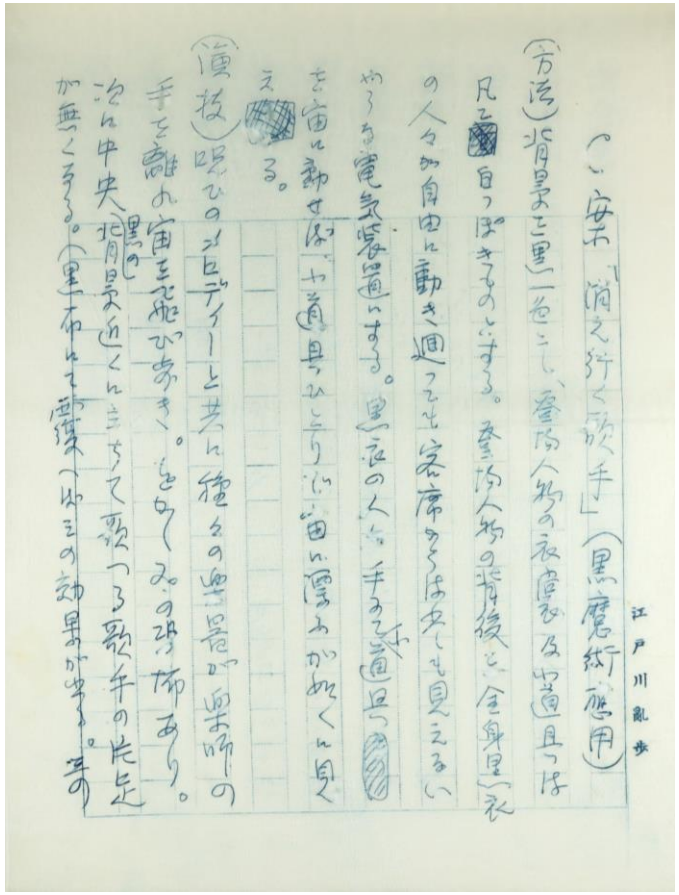
歌手歌ひ終りし時、呪ひのメロディ聞え来り人々狼狽する内、舞台暗黒となる。背景の前方、後方又は斜前等適当なるケ所より、背景全面に映画の如き強力なる光線をあてる。（随つて背景は影絵の邪魔とならぬやう豫め白つぽいものでなくてはならぬ）



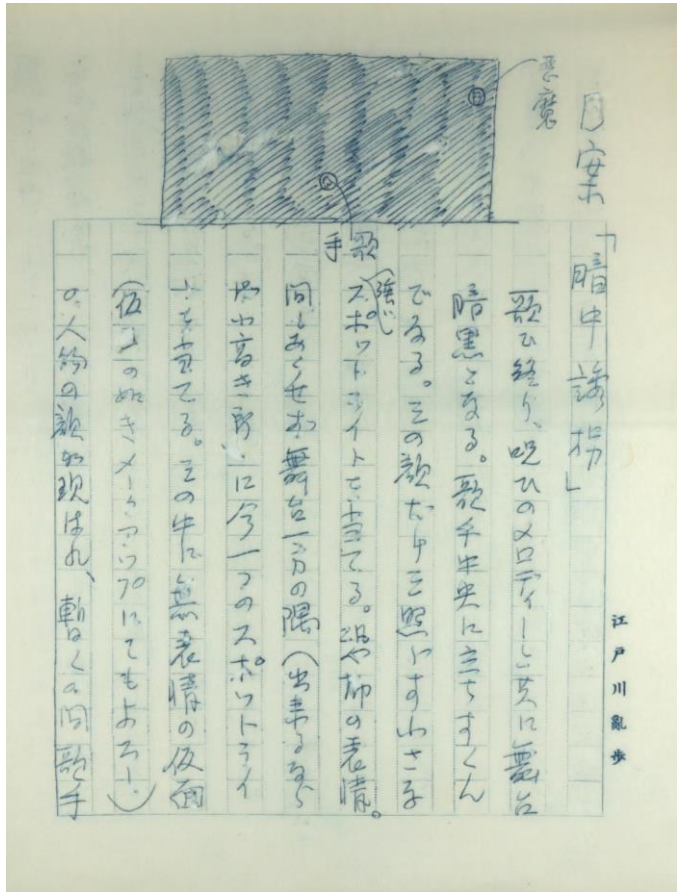
1/15

〔「レヴュー殺人事件」乱歩原案6枚目〕
C案「消え行く歌手」（暗黒魔術応用）
（方法）背景を黒一色とし、登場人物の衣裳及小道具は凡て白つぽきものとする。登場人物の背後を全身黒衣の人々が自由に動き廻つても客席からは少しも見えないやうな電気装置にする。黒衣の人々手にて小道具を宙に動せば、小道具ひとりで宙に漂ふが如くに見える。
（演技）呪ひのメロディーと共に種々の楽器が楽師の手を離れ宙を飛び歩き。をかしみの恐怖あり。
次に中央黒の背景近くに立ちて歌へる歌手の片足が無くなる。（黒布にて覆へばその効果が出る。奇

〔「レヴュー殺人事件」乱歩原案3枚目〕
B案「暗中誘拐」
歌ひ終り、呪ひのメロディーと共に舞台暗黒となる。歌手中央に立ちすくんでゐる。その顔だけを照らす小さな強いスポットライトを当てる。恐怖の表情。間もあらせず舞台一方の隅（出来るなら■〔ば？〕小高き所）に今一つのスポットライトを当てる。その中に無表情の仮面（仮面の如きメークアップにてもよろし）の人物の顔が現はれ、暫くの間歌手



6/15



3/15

B案「暗中誘拐」とC案「消え行く歌手」は、ともに暗闇にした舞台を前提としている。

明暗とライティングを利用し、人物の顔の浮遊や、体の消失などを演出するトリックは、少年探偵団シリーズ『虎の牙』（『少年』1950年1月～12月）における魔法博士の奇術を彷彿とさせる。

〔「レヴュー殺人事件」乱歩原案一三枚目〕

江戸川追加

（既述A、B、C案は真の暗黒を要するを以て、客席背後より光線の入るおそれある昼間興行にはむつかしいのではないかと気づいたので今一つ別案を附加へます。

E案「キングとジャック」

背景を一面の洋室の壁となし、正面、両袖に六個以上の大トランプの額又は壁模様が並んでゐる。トランプは凡てキング、クヰーン、ジャック等、人物のある札にて、その人物は等身大。

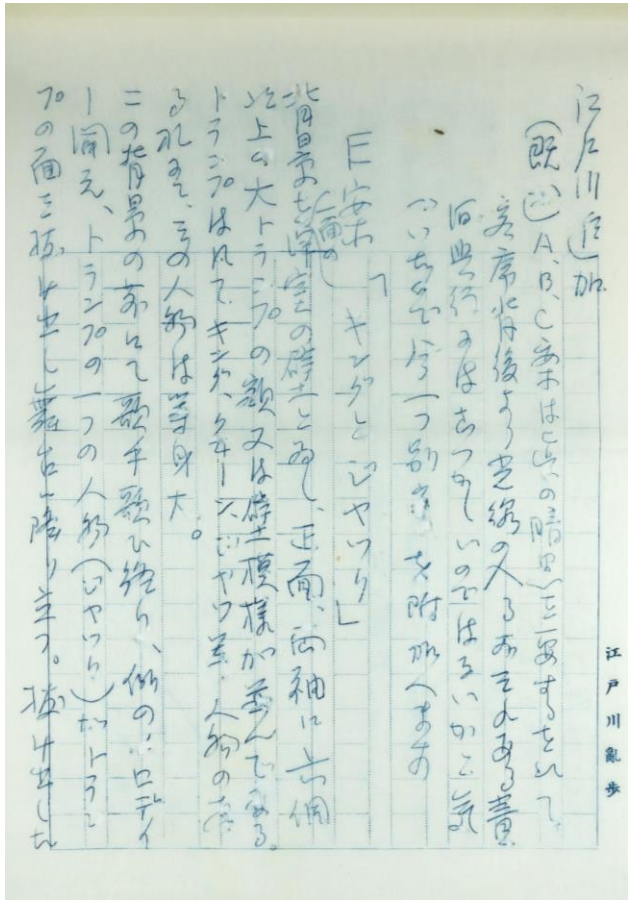
この背景の前にて歌手歌ひ終り、例のメロディー聞え、トランプの一つの人物（ジャック）がトランプから抜け出し舞台に降り立つ。抜け出した

〔「レヴュー殺人事件」乱歩原案一〇枚目〕

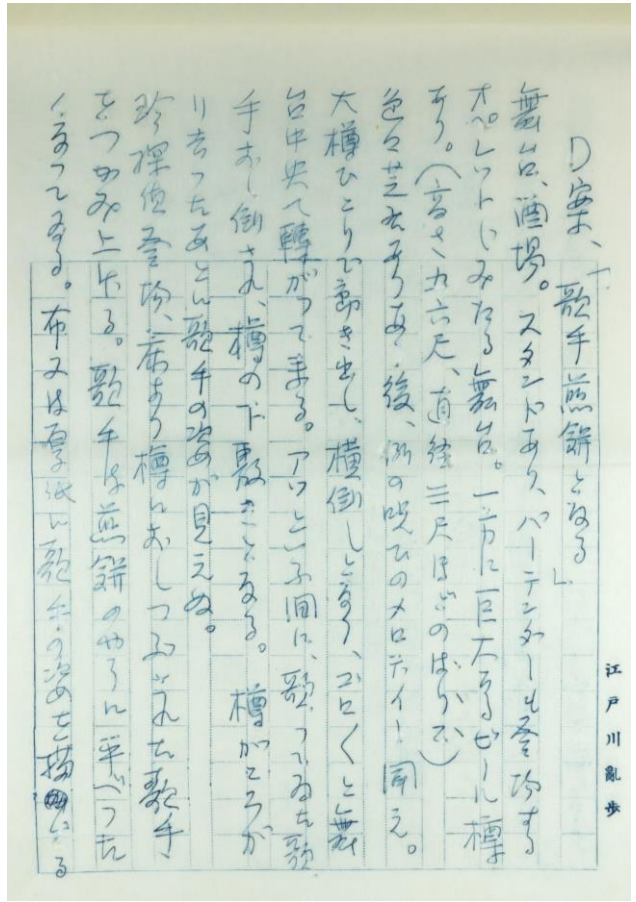
D案、「歌手煎餅となる」

舞台、酒場。スタンドあり、バーテンダーも登場するオペレットじみたる舞台。一方に巨大なるビール樽あり。（高さ五六尺、直径三尺ほどのはりこ）色々芝居ありある後、例の呪ひのメロディー聞え。大樽ひとりで動き出し、横倒しとなり、ゴロ〳〵と舞台中央へ転がつて来る。アッといふ間に、歌つてゐた歌手おし倒され、樽の下敷きとなる。樽がころがり去つたあとに歌手の姿が見えぬ。

珍探偵登場、床より樽におしつぶされた歌手をつかみ上げる。歌手は煎餅のやうに平べつたくなつてゐる。布又は厚紙に歌手の姿を描ける



13/15



10/15

D案「歌手煎餅となる」とE案「キングとジャック」には舞台の奥行きを活用した仕掛けが用いられている。

乱歩の五つの案は全て、舞台という空間によって生じる錯覚を利用し、手品の技術を応用することで怪奇を演出するものとなっている。

「レヴュー殺人事件」脚本

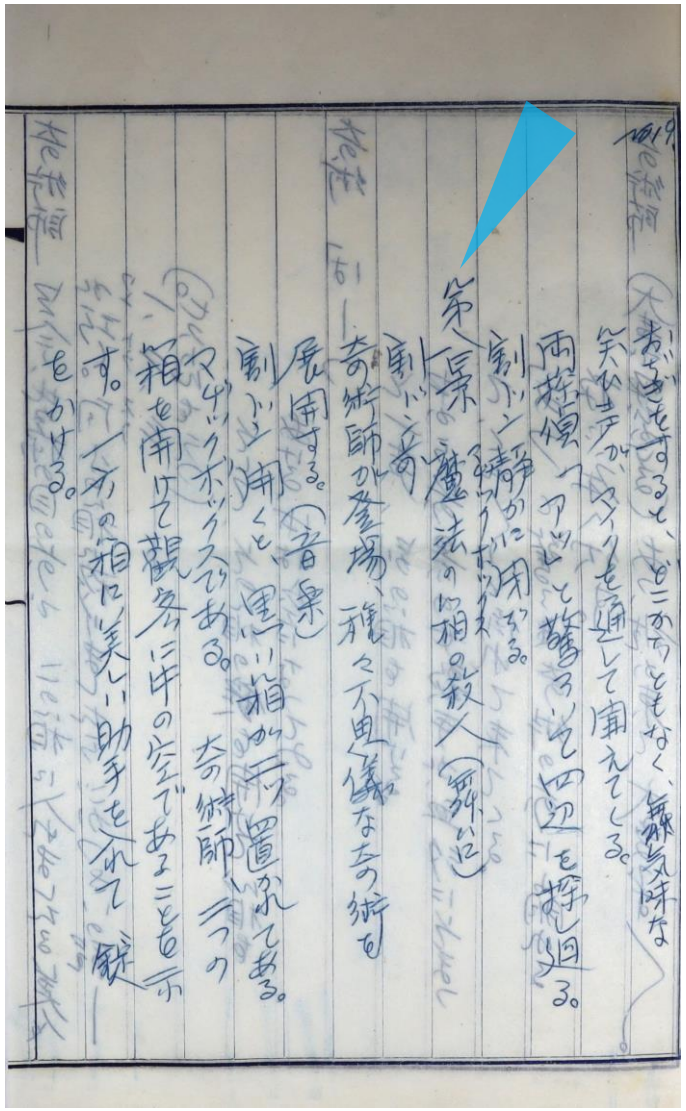
1947

寄託資料

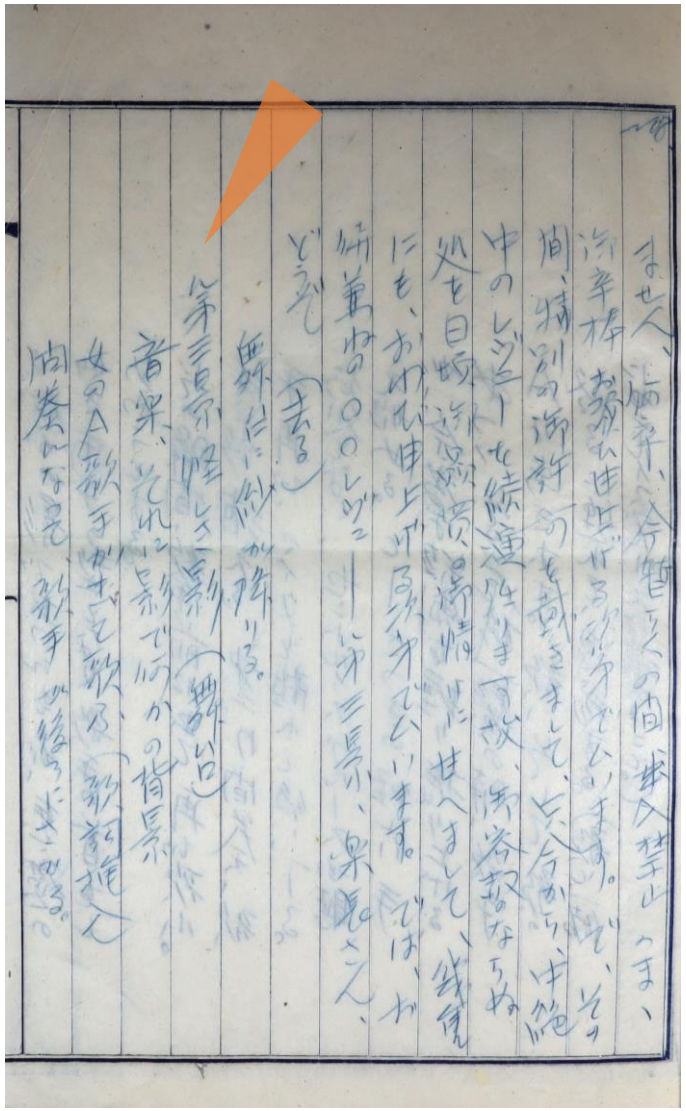
乱歩原案の奇術を用いた歌手殺害の演出は、脚本ではいくつかの場面に分散されて反映されている。

「第三景　怪しき影（舞台）」に登場する巨大な手と短剣、そこから滴る血のような影絵は、乱歩原案のイラストと似ているが、ここでは殺人行為は行われない。

歌手殺害の様子が演じられるのは、「第八景　魔法の箱の殺人（舞台）」だ。この場面では奇術師が空の箱に助手を手品で移動させ、助手と女性歌手の遺体がさらに入れ替わるという奇術が活用されている。しかしそれは、乱歩原案にあったような、明暗や奥行きの錯覚を利用した奇術ではない。



22丁表

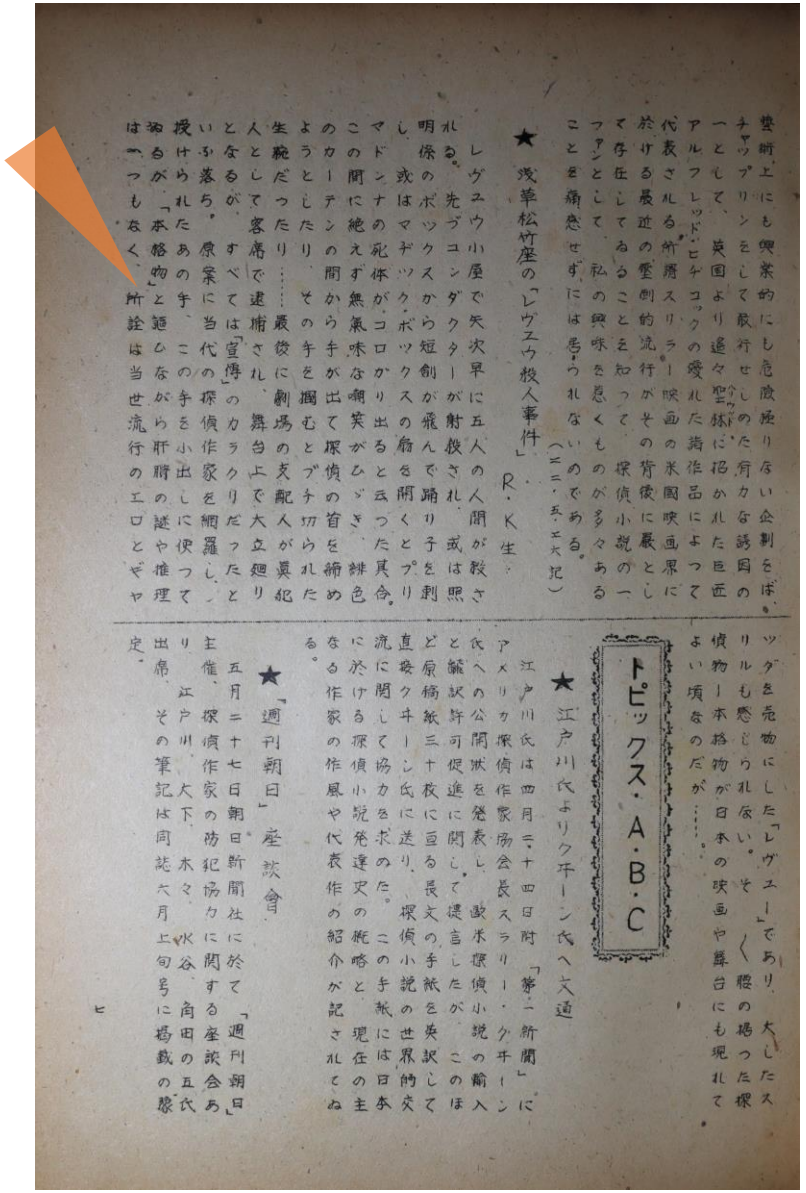


11丁表

R・K生
「浅草松竹座の『レヴユウ殺人事件』」

『探偵クラブ会報』創刊号　1947/6
立教大学図書館蔵

「所詮は当節流行のエロとギャッグを売物にした「レヴュー」であり、大したスリルも感じられない」と酷評するもの。当時の探偵作家・愛好家にとっては満足のいく出来ではなかったことが予想される。



★浅草松竹座の「レヴユウ殺人事件」　R・K生

レヴユウ小屋で矢次早に五人の人間が殺され、或は照明係のボックスから短剣が飛んで踊り子を刺し、或はマヂック・ボックスの蓋を開くとプリマドンナの死体がコロがり出ると云つた其合。この間に絶えず無氣味な嘲笑がひゞき、緋色のカーテンの間から手が出て探偵の首を締めようとしたり、その手を摑むとブチ切られた生首だつたり……最後に劇場の支配人が真犯人として客席で逮捕され、舞台上で大立廻りとなるが、すべては「宣傳」のカラクリだつたといふ落ち。原案に当代の探偵作家を網羅し、授けられたあの手、この手を小出しに使つて始るが「本格物」と題ひながら肝腎の謎や推理は一つもなく、所詮は当世流行のエロとギャッグを売物にした「レヴユー」であり、大したスリルも感じられない。そ〳〵腰の据つた探偵物一本格物が日本の映画や舞台にも現れてよい頃なのだが……。

トピックス・A・B・C

★江戸川氏よりクヰーン氏へ文通

江戸川氏は四月二十四日附「第一新聞」にアメリカ探偵作家協会長スラリー・クヰーン氏への公開状を発表し、欧米探偵小説の輸入と飜訳許可促進に関して提言したが、このほど原稿紙三十枚に亘る長文の手紙を英訳して直接クヰーン氏に送り、探偵小説の世界的交流に関して協力を求めた。この手紙には日本に於ける探偵小説発達史の概略と現在の主なる作家の作風や代表作の紹介が記されてゐる。

★「週刊朝日」座談會

五月二十七日朝日新聞社に於て「週刊朝日」主催、探偵作家の防犯協力に関する座談会あり、江戸川、大下、木々、水谷、角田の五氏出席。その筆記は同誌六月上旬号に掲載の豫定。

出品資料リスト

資料名		所蔵	掲載スライド番号
Introduction			5
江戸川乱歩『人間豹』	一号館書房　1946	大衆文化研究センター	3
江戸川乱歩『湖畔邸事件』	乱歩選集1　スピカ　1946	大衆文化研究センター	3
江戸川乱歩『黄金仮面』	丘書房　1946	大衆文化研究センター	3
江戸川乱歩『猟奇の果』	日本小学館　1946	大衆文化研究センター	3
江戸川乱歩『闇に蠢く』	オール・ロマンス社　1947	大衆文化研究センター	3
江戸川乱歩『柘榴』	雄鶏社　1947	大衆文化研究センター	3
「パレットナイフの殺人」脚本	「完全なる犯罪」脚本	寄託資料	4
「パレットナイフの殺人」ポスター	『貼雑年譜』第4巻	寄託資料	4
「パレットナイフの殺人」チラシ	『貼雑年譜』第4巻	寄託資料	4
Chapter 01.			5
『宝石』創刊号	岩谷書店　1946/6	立教大学図書館	6
William Irish/Phantom　Lady	Pocket Books, 1944, c1942	立教大学図書館	5,7
「顔のない女」解説および翻訳原稿		寄託資料	8
Cornell Woolrich/The Bride Wore Black	Pocket Books　1945	立教大学図書館	9
William Irish/Deadline at Dawn	Armed Services Editions　c1944	立教大学図書館	10
横溝正史宛書簡控	「初書簡控　昭和21年5月3日～31日」	寄託資料	11
「昭和二十一年初　貸本控帖」		大衆文化研究センター	12
Craig Rice/Having Wanderful Crime	A Harper Sealed　1934	立教大学図書館	13
John Dikson Carr/The Blind Barbar	Pocket Books, 1945	立教大学図書館	13
トリックノート第一		寄託資料	14
欺瞞系譜		寄託資料	15
探偵小説ツリック分類表		寄託資料	15
Chapter 02.			16
「探偵作家クラブ規約」草稿控	「発書簡控　昭和22年4月28日	寄託資料	17
「探偵作家刑事探偵座談会席次」	『貼雑年譜』第4巻	寄託資料	18
土曜会題目表	「発書簡控　昭和22年１月29日 ～２月25日」	寄託資料	19
探偵小説土曜会御案内	『貼雑年譜』第4巻	貼雑年譜	19
坂口安吾宛書簡控	「発書簡控　昭和21年11月15日	寄託資料	20

資料名		所蔵	掲載スライド番号
「「本陣殺人事件」を読む」原稿		寄託資料	21
横溝正史宛書簡控	「発書簡控　昭和22年1月8日～1月15日」	寄託資料	22
横溝正史『本陣殺人事件』	青珠社　1967/11	立教大学図書館	16,23
横溝正史『蝶々殺人事件』	月書房　1968/1	立教大学図書館	23
横溝正史宛書簡控	「発書簡控　昭和22年1月29日 ～2月25日」	寄託資料	24
桜三吟	『貼雑年譜』第4巻	寄託資料	25
Chapter 03.			26
「レヴュー殺人事件」脚本		寄託資料	27-29,41
「レヴュー殺人事件」広告 （『夕刊新大阪』1947/3/14）	『貼雑年譜』第4巻	寄託資料	30
「レヴュー殺人事件」（『夕刊新大阪』 1947/3/14）	『貼雑年譜』第4巻	寄託資料	30
「レヴュー殺人事件」広告 （『読売新聞』朝刊　1947/5/21）	『貼雑年譜』第4巻	寄託資料	30
「Diary　1947」		大衆文化研究センター	31
「受領証控　昭和21年11月９日～22年７月９日」	「受領証控　昭和21年11月９日	寄託資料	32
木々高太郎宛書簡控	「発書簡控　昭和22年１月29日 ～２月25日」	寄託資料	33
海野十三宛書簡控	「発書簡控　昭和22年１月29日 ～２月25日」	寄託資料	34
「探偵作家クラブ収支控」		寄託資料	35
森下雨村宛書簡控	「発書簡控　昭和22年１月29日 ～２月25日」	寄託資料	36
Chapter 04.			
「レヴュー殺人事件」原案	「発書簡控　昭和22年１月29日 ～２月25日」	寄託資料	1,38-40,44
「浅草松竹座の『レヴユウ殺人事件』」	『探偵作家クラブ会報』	大衆文化研究センター	42

本展示における江戸川乱歩『探偵小説四十年』の引用は『江戸川乱歩全集第29巻　探偵小説四十年（下）』（光文社文庫、2006/2）に拠った。

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
Rikkyo University The Edogawa Rampo Memorial Center for Popular Culture Studies

WEB展示

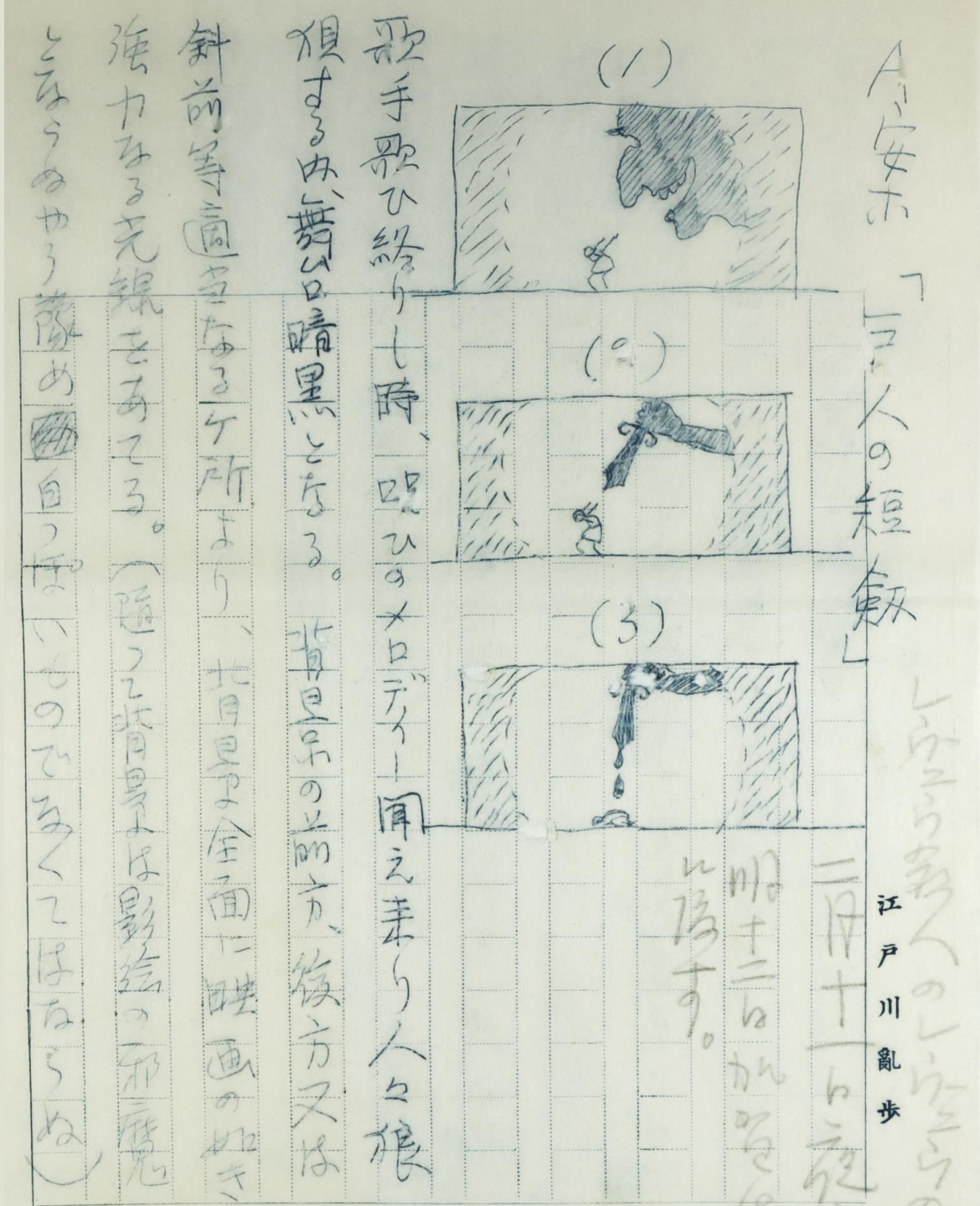
戦後の乱歩と「レヴュー殺人事件」

江戸川乱歩旧蔵資料展

終了

ご視聴いただき、ありがとうございました。

本展示に際してご協力いただきました平井憲太郎氏、立教大学図書館に御礼申し上げます。

本展示の画像その他文面などの無断転載・無断使用はお断りいたします。ご利用になりたい場合は、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターまでご連絡下さい。

- 題字――――――髙橋 涼華
- 執筆担当――――米山 大樹（立教大学　兼任講師）